

---

# 狂気と芸術の交差する街

たけ10005

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂気と芸術の交差する街

### 【Nコード】

N8764G

### 【作者名】

たけ10005

### 【あらすじ】

この小説は、本当に存在するものも多々ありますが、この物語と現実の団体名、人名、アイテム（二十六の武器など）はフィクションでつながりはありません。シチリア島を舞台に、血と硝煙にまみれた世界を生きることになった男性美術留学生と、二挺拳銃の女性との交流を描いた純愛ガンアクション小説です。一部”小説家になろう”の作家HSさんに監修してもらいました。物語の最後に各話のあらすじと武器解説があります。

## 1 文明と運命の交差点 (前書き)

最終話は、昭和五十六年に発表された歌、夢○途中…○の途中ですね、来生た○お…○かおさんの歌をエンドレスで聴きながら読むと良いかも。最近のドラマ、”セーラ○服と機関銃”のテーマソングです。二十代以下の方々は、親御さんにカセットテープでも借りてみたり、CD探してくださいませ。

あと、途中で知ったのですが、EXI○EがTiAm○歌ってますね。パクリじゃないのですが、ラストの戦闘後、キアーラが去るシーンでTiA○O聴くと良いかも。

物語の最後に各話のあらすじと武器解説があります。

著作物”ベラノツテBellia Nott e”の一部紹介してます

## 1 文明と運命の交差点

「なあ、なんで死んじゃったんだよ!? エイジ……!」

二挺拳銃使いキアラは嘆き悲しむ。骸むくろと化した恋人の前で。

(幸せだったよ。君と出会えて……愛しのキアラ)

――半年前――

世界三大美港の一つシチリア島に昨日からいる青年が、ひとり。

プレトリア広場で裸体の彫刻を観て、姫路城前の通りにある彫刻を思い出した青年が一人、「恥の泉とは言い得て妙だな……」とつぶやく。青年は夜、ライトアップされて美しいと聞きここに夜着いた。その前は、”ゴッドファーパーART?”の舞台、マレッシモ劇場という歌劇場にいた。

ここは、石畳に靴音が響くパレルモの街。

さながら、宮殿のように建ち並ぶ街並だ。

彼は午前中、紀元前八世紀に建設された都市、カテラドーレを訪れた。

ローマやイスラムをはじめ多くの文化の影響を受けたその街は、多種多様な建築様式が入り混ざっていた。それが、”文明の交差点”と呼ばれてる由縁だ。

食べ物もいくばくか宮殿料理のようで、レストランの装飾もそれをおぼろげに思わせる。

イタリアは温故知新を胸に、自国の歴史や伝統をも大切にしている。人口は約5800万人。

イタリアは南北に細長く、温暖で四季がはっきりしている。

日本の気候とよく似ていて、ミラノ、ローマも東京の気候とさほど差がない。ただ、朝夕の温度差が大きい。冬季はかなり寒くなる。夏は乾燥し、雨は冬にやや多い。

イタリアならではの街並だが、特にこのシチリア島は治安も悪く、彼は明日にはフィレンツェの借家に帰る予定だった。あの女達と、出逢うまでは。

シチリア島。イタリアの中でもこの街は、裏社会では有名な血と硝煙うえんの街。

そこでクリスマスを迎えた青年の名は英二。

そう、時は二千八年十二月二十四日水曜日。全てはここから出会い、必然が始まる。

Panettone……イタリア語で”大きなパン”というクリスマス菓子を大切そうに持ち歩く留学生の英二。

彼はフィレンツェに美術留学し、かれこれ一年が過ぎようとしている。

イタリア最南端のシチリア島でクリスマスに雪が降る予報があり、さっそく英二はそこに向かった。

ホワイトクリスマス……初めて食べるPanettone……今年……いや、来年かな？良い年になりそうだ。

一方、キアラと他の仲間らしき人物三人は五人の敵に追われ、街を駆け抜けていた。

そこで英二と曲がり角でぶつかる。Panettoneは踏まれて潰れた。

「どけっ！黄色人！巻き込まれてえか！？」

「え？え？」

銃声がクリスマスをかき割る。

「うあ！」

「Whaw！ジュゼッペ！大丈夫か！？」

ジュゼッペと呼ばれた男は、背中を撃たれ死んだ。

「アルフレード！ かまうな！ 目標は近い！」

古い日本人が思うアメリカ人のように、言葉の始めにハイカラな言葉遣いを話す人物がアルフレードというらしい。

「ボス、ジュゼッペが殺されちゃ武器庫は開けられねえぜ」

女は舌打ちして言った。

「ハッカーが死んでは……ってことか……」

「待ってください！ 僕も連れて行ってください！ 戦場にいたくない！ 避難させて！」

ボスと呼ばれた男までが舌打ちした。

「なに寝ぼけてやがる！？ 見たところ平和ボケしたガキじゃねえか！ ついてくんない！」

女は先に武器庫と呼ばれていた、あからさまに屋敷にたどり着いた。「クソっ！ デジタルロックがかかってる！ おい！ ジュゼッペが武器庫になるって言ったろ、ここまで危険なこととして手ぶらはいやだぜ！ なんとかしろ！」

女に言い詰められ、ボスは渋い顔をする。

「僕が！」

そこで、今まで後をついてきた英二が名乗りを上げる。

英二はノートパソコンをセキュリティシステムにハッキングしてロックを開けた。

「開いた！」

「よし、武器は全部いただき！ サブマシンガンで敵を討て！ よくやってくれた、青年！」

「英二です」

「わかった、エイジ。ありがとな」

ボスは上機嫌な顔で宝の山を背に三人で敵を倒した。

その後、エイジはボスことアレッシオを筆頭に何でも屋をやっているイドリスという組織に身柄を拘束された。

女がキアラ、ボスがアレッシオ、その他がアルフレード。

襲われた理由は武器庫の取り合いだった。「犯罪者に荷担したこと

がバレませんように」というエイジの声は三人に聞こえたが、無視された。

犯罪者ことアレッシオ達は、お宝の山に目を輝かせて武器をいただいて行つた。

なんでも、武器オタクの別荘らしい。敵は警備の人間だった。

「最悪だ……」

エイジはうなだれた。

なんでも屋の仕事は殺しが主。

犯罪者と一般人の区別がつきづらい、胸くそ悪い世界を保持し続けたがる右翼。それに対し、改革をし、新世界を統一する信念の左翼政治家に通ずるテロリスト。。。

アレッシオ達は下働きみたいなものと事務所に帰りがてらエイジに言った。

そんな人達と出逢った日がクリスマスとは、悪い冗談だと、エイジは奥歯を噛みしめた。

## 2 交流（前書き）

ここでは、各々の武器を紹介しています。この小説を読むのは良いけど、どんなシステムを搭載した銃かは聞かなくてもいいかな？という方々は適当にあしらうように読み飛ばしてください。最初と最後は読んでいただきたく存じます。



## 2（交流）

エイジは”もう一つの世界の住人”であることにお気づきか？

軍警察（憲兵隊）……Carabinieriの手の及ばないシチリア島。国家警察……Polizi di Statoはいるが、保守派が人民を幸福にすると主張する右翼政治家によって行動は制限されている。国家警察総局……DCPPはシチリア島を”黙認している”。あくまで、観光客の為のサツ。ましてや、治安作戦中央部隊……レザーヘッドは”認知していない”。

胸くそ悪い世界を新しく統一し、共産主義にする信念の左翼テロリスト、ウルティマに所属する殺し請負兼なんでも屋、ピストレーロがエイジを巻き込んだ組織だ。

ウルティマは左翼政治家の陰からの支援によって運用されているテロ組織だ。

また、ウルティマは軍人などのプロを今までの倍の給料から数倍の給料で引き抜いた”少数尖鋭”だ。

それまでの説明をアレッシオから聞いたエイジ。殺られた仲間の補充まで協力を”任意”でアレッシオから要請されている最中だ。

ピストレーロの事務所……モンレアーレに向かう車内でエイジはそれぞれに質問する。

まずはボス。

「アレッシオの愛銃は？」

「今日からは、ベレッタM93R……イタリア内務省が、セキュリティ要員の装備として開発を要請したもので、販売対象は政府機関のみ。一回の射撃で三発の弾丸を発射する三点バースト機構を備えた銃だ。装弾数は二十十一発」

形は銃口がサブマシンガンみたいだ。

「最後に骨董品、44オートマグだ。シルバーの美しいシルエット。実用的ではなく、作動不良……ジャムが頻発する”オートジャム”」

の悪名で名高くなってしまった。美しさや、斬新な構造には熱狂的ファン多数。ということだ」

「わからない」

自分で聞いておきながら、エイジはサジを投げた。

No. 2のキアラに気になったことを聞く。

「二挺拳銃である意味は？ 反動は二倍、狙いだって二ヶ所を同時に撃ち抜くなんて神業だ。なのに、なぜ？」

「美しいからさ。あとではできるからさ……真似はしない方がいい。なぜなら、二挺も拳銃を同時に撃つなら携帯性のある銃身を限界まで詰めた小型サブマシンガンでも持てば良い。拳銃じゃなきゃやなどと言っても、死ねば元も子もない」  
なるほどと合点がいく。しかしエイジは疑問にたどり着いた。

「二挺とも違うヤツだね」

「コルト・パイソン・357マグナム四インチ……357マグナム弾のコルトの最高級リボルバー拳銃。精度も競技用として使えるほど」

これは一般人が想像する形の拳銃。

「スミス&amp;wesson M29……四十四口径のマグナム・リボルバー。ハンティング用として使えるが小型のサブマシンガン並み。扱いは難しい」

これはコルト・パイソンよりリーチが長いように見える一般人が想像する形。

「将来的には、今日もらった、H&amp;wesson MK23……別名USソーコム・ピストルに変える。どちらを捨てるかわからねえけどな。軍の特殊部隊向けに開発された物。性能面ではカスタムガンに匹敵する。三カ月後に使う予定だ。今日手に入れたから、上手く扱えなくてな」

エイジは考えた。

（なら、アレッシオはなぜ愛銃を新しいのに？ 早すぎるのでは？）

「キアラ、腰のハンマーみたいな銃は？」

キアラは、大砲のような銃を手にとる。

「デザートイーグルだ」

「hey、キアラ、今日はご機嫌斜めか？　いつもはデザートイーグルの話もつと長いのによう」

「実用性皆無の競技用なんだよ」

アルフレードに続き、アレッシオも口を挟む。

「別にご機嫌斜めच्छーわけじゃないけどさ、素人に言ってもなあ」

キアラの思った通り、エイジは頭の上にハテナが浮かぶ。

「実用的でないのに持ってるの？」

「あのな、ガンマンがデザートイーグル持たなくてナニ持つよ！？」

男がでけえイチモツ欲しいのと同じだ。至近距離から二の腕の動脈にでもぶっ飛ばしゃ、血管逆流して心臓麻痺起こすだろうよ！」

やはりご機嫌斜めに見えると、エイジは話題を変える。

No. 3のアルフレードに聞く。

「さっきはアサルトライフル使ってたけど、役職は？」

「スナイパー兼アサルトライフル担当さ。愛銃はSIGブレイザーR93ロングレンジIIスポーターというモデル……形は天体望遠鏡のような感じだな。見ての通り二脚式だ。

それと、愛銃アサルトライフルは、今日からスタイアー・マンリッヒヤーAUG……軍用だ。緑色の銃身に茶色のブロックのようなカートリッジが特徴で曲線も美しいだろ？」

「爬虫類みたい」

「アウチ！　ひでえじゃねえか！」

黙って聴いていた二人が笑う

「くっ」

「あははっ」

「元左利き、現在両利きのためコイツが使いやすい。まさにお宝さ。」

護身用の拳銃はマテバM2006M……これは元々持ってた。イタリア製のリボルバー。マテバ社はイロモノのリボルバー拳銃を作るのに心血を注いでる。これは発射口の違いだな。さらに、用途に合わせて銃身を簡単に交換できる。生粋のイタリアーで変わり者だから、マテバ社が好きってわけさ」

「自分で変わり者って言うか……なんでイロモノを？」

「俺はイタリア人だぜ？ オシャレにいこうぜ！」  
頭をかかえるエイジ。

「だから服がダジャレなんですか？」

「バッカ野郎！ ホワイトタートルネックにホワイトシャツ、ブルージーンズにブラックジャケットといやあ、金をかけずに洒落を決め込むイタリア人のたしなみだぜ！？」

「代官山でもそんな格好してる人いませんがね。ちなみに代官山は日本のカリスマ的ファッション街です」

「あゝ、そゝかい。bat、芸術は守らなきゃならねえ。そのためには、芸術を消費しなきゃな」

エイジがとても銃を覚えきれないと嘆く。

「俺達は一時的な運命共同体だ。とりあえず気になったのだけ覚えてると戦い方の流れがわかる程度。結果だけ……生死だけ知れば良いだろう。エイジ。俺達は”ひと仕事”って言っただろ？ 殺しもさせない。殺されもしない。記念程度に覚えていても、忘れても構わない」

あれこれ話しているうちに着いた。

パレルモから車で約三十分のこの街は、あのドウオモがある。

「なんでまたモンレアーレに事務所を？」

エイジは誰ともなく聞く。

『内装が黄金のドウオモがあるから』

ハモった。

「は？」

エイジは素っ頓狂な声を上げた。

「oh、いや、だからな？ 俺たちゃ生粋のイタリア人なんだ。芸術を愛するのは当然だろ？ モンシアーレのドウオモは、内部が黄金のモザイク画があり、派手好きな俺らにおあつらえ向きだろう？」

アルフレードはさも当然のように言いながら何かを焼いている。

「バカだ！ こいつらバカだ！」

真っ先に反応したのは、キアーラだった。

「玉あ無くしたいか？」

キアーラの銃がエイジの股に当てられる。

エイジは真っ青になる。

「すみません……ところで、何を焼いているのですか？」

エイジは本のような炭を見てハツとする。

「パスポート！」

エイジは、服を探ってパスポートを探す。

「……無い」

「ビンゴ。」

アルフレードは、ニヤリと笑う。

「ボス、こいつは俺にくれ」

アレッシオは眼光がキツくなる。

「ハッカー兼パシリか？」

「yes」

エイジは、覚悟を決めた。この組織は、ハッカーが欠員だ。

つまり、アルフレードはエイジを”正式に”ハッカーにする気だ。

「僕からもお願いします！ 組織に入れてください！ パスポートはだれかさんに焼かれちゃったし……正義の為に」

アレッシオはエイジの肩を叩く。

「俺たちや、殺し稼業だ。正義なんかじゃない。目標は政治家殺しだし。それでもいいんだな？」

「支援者であるエンツォ氏は左翼です。それに間違ってるのは右翼最大の支配力を持つレオポルドです！」

エイジは、自分の意志を伝える。

「OK、エイジ……人は、否応なく動かなきゃならない時がくる。エイジには今がその時だ」

夜が明ける。そつとかざす手のひらに太陽が触れる。眩しい……。

——方敵の方は……——

「ラウラ、エンツォに殺し屋を三人放て。完全なるグループより、一人一人屈強な戦士をだ。電脳戦に長けた者を入れるのもいいかもな」

ラウラと呼ばれた女性は、どうやらレオポルドの側近らしい。

レオポルドは高級チェアに体重をかけ、夜景を見ながら高級赤ワインを手にする。

「かしこまりました。あなた達、聞こえたわね？ すぐに手配なさい」「はっ」

屈強な男達は、イタリアンマフィア、ピオーヴラの幹部であるラウラに敬礼した。

ラウラは元イタリア軍少佐である。出世頭な理由は二つ。

一つは指揮官としての才があるから。

もう一つは、銃の腕が一級品だからだ。

ラウラは人払いをすると、レオポルドの肩に腕を絡める。

「今日は、どう酔わせてくれるのですか？ レオポルド様……」

つまりは、そういう関係なのだ。

もしこの関係が露呈すれば、レオポルドとて無事には済まない。真に酔っているのはレオポルドなのだが、当人はまったく自覚がなかった。

別に右翼政治家がバカなわけではない。ただ、頑かたくなに伝統を守ろうとするあまり、周りをあまり見ない性格なのだ。レオポルドという男は。

### 3 ㄱエイジの戦闘と駒ㄱ

はれてピストレーロの一員になったエイジ。暗号化されたプライベートルチャットを覗く趣味を持つだけの人間がこの結末……絵だけは描いてきたのに……と落胆。

アレッシオはエイジに武芸の有無を聞く。

「ところでエイジ、サムライだろ？ 剣術や柔術はできるか？」

「……すみません、できません。サムライでもありません。とつくに滅びました」

エイジは、ちよつと怒り気味に答えた。

「仕方ないなナイフコンバットと拳銃を護身術にしろ。それともオマモリがいいか？」

キアラは大笑いする。

「ヒヤハハッ！ そりゃあいい。オマモリにしろ」

「殺す気か！」

事務所でエイジはナイフのクリスリーブ・プロジェクト？を渡された。グリップは中空で、柄のキャップを外せば、サバイバルツールの収納もできる。

銃はグロック19。全米の警察で五十パーセント以上のシェアを誇った。トリガーに指を触れただけで解除されるセイフティと、落下などの衝撃による暴発を防ぐ機構を組み込んでいる。つまり、エイジのような安全装置を外し忘れるシロウトでも扱える。装弾数は五十一発。形は銃身とグリップを詰めたコンパクトモデルを渡される。

「hey、これならお誂え向きだろ」  
あつち

アルフレードのオススメだ。

扱うサブマシンガンはVZ61スコープオン。威力としては心許ないが、コンパクトなサイズとコントロールの容易さが長所だ。

さっそく戦場へ向かう。場所は世界三大美港の一つ、シチリア島にあるタオルミーナのイゾラ・ベッラという島だ。

澄んだ青い海に浮かぶ島が、今日朱く燃ゆ。

高い所から景色を観ると、蒼、緑、茶、紅……カラフルな宝石箱のようだ。

アレッシオはさっそく指示を出す。今回は敵は烏合の衆。適当にあぶって飛び出した雑魚<sup>ザコ</sup>を狙い撃ちすれば任務完了だ。

容易いと判断したアレッシオは、エイジの初の戦場をこれに定めた。「VZ61スコープィオンを使え。威嚇だけでいい。殺しは嫌だろ？」  
粋な計らいは、アレッシオの十八番だ。

「わかった、やってみる」

銃を使った初仕事では、やはりというか反動で手元が狂うエイジ。

「折り畳みストックのストッパーを兼ねたフロント・サイト・ガードを使え！反動を肩に吸収させるんだ！グリップ下側のレイト・リデューサー・ノブで、発射速度を毎分最高七百五十発まで調整できる！合図を送ったら最高速で敵さんのケツに火を着けてやれ！」

アレッシオは努めて解りやすく説明したつもりだが、エイジには半分しか理解できない。

「レイト・リデューサー・ノブ？あんたたち、なんで機構の名称を暗記できるんだ！？」

アレッシオは、武器オタクなのだが、漢字文化の日本の方が解せないというように抗議する。

「俺に言わせりゃ、日本語覚えられる日本人の方が凄いで！」

「日本人は日本語を覚えきれない人がほとんどだから、辞書もあるし、読めない字、書けないもたくさんある」

アレッシオは目を丸くした。

「ああ！？なんだそりゃ！？」

別々に行動してる仲間も、無線で聞こえたらしく、疑問が飛び交う。つまりは、それほど余裕のある簡単な仕事なのだ。実は、このピス



トレーロは最高峰の人員が投入されている。

ほどなくして、もはや葉莢と硝煙まみれの真っ白な世界が晴れ、仕事は終わった。

「hey、エイジ！ 初仕事はどうだったよ？」

アルフレードはエイジの無事な姿を見て、背中をバンバン叩く。

「銃って、映画では軽々扱ってるけど、すごい反動だね。切り傷一つでもあったら、痛みで失神するんじゃないか？」

「かもしれないけど、違うかも」

わけのわからない言葉を発するキアーラ。

「あたし、失神には至らなかったよ」

さも当然とばかりに怪我しました宣言。

「安心しろ、エイジ。ハッカーが戦闘に巻き込まれた時の対処法を考えるために連れてきただけだ。普段はオフィスでカタカタ機械を操ればいい」

アレッシオの言葉に安心したエイジは、車に乗ると疲れから早々に寝息をたてた。

「ボス、エイジはキアーラに似てるな……」

キアーラは一杯やってから帰ると、エイジの祝杯から逃げたのだが、自分と通ずるものがあると感じたのだろう。

アルフレードは、アレッシオを見やる。

俺達四人、また全員孤児みなしごなのかねえ……

アレッシオは愛煙のセブンスターをくわえた。

道は、まだ先だ。

「ラウラ、ボクの手足になる戦士を紹介してくれるそうだね」

バーボンをチビチビ呑みながら、髪をいじるレオポルド。

この男は品性というものが、今自分の作り出した空気だと信じて疑わない。

「はっ！ お前達入れ」

かくして四人の手勢が集まった。

「ん？ 四人？」

レオポルドは間拔けな言葉を発する。

「はっ！ ガエターノ、チェーザレ……我々の実力No. 1 二挺拳銃使い、双子男性です異名を双鬼。と申します」

ふむ……と、神妙になるレオポルド。素人目にもわかる百戦錬磨の手練れだ。

「シモーネ……実力No. 2 男性。見ての通りヘロイン中毒者でボーンとして落ち着いていますが、やる時は超一流の狙撃手です。実績も確かなものです。ヤク中とか呼ばれてますが、念のため左翼政治家の首を持参しました」

死体は、寸分の狂い無く心の臓を貫かれていた。

「なるほどな……そちらのメイド服の女性は？」

「ペトリューシユカ……私の腹心です。コスプレ好き、というのが玉に傷ですが、ハツカーです。ネットワークの全てが彼女の巣……ということから、蜘蛛女と呼ばれています」

駒はそろった。一世一代の人生ゲームの始まりだ。勝利の女神は、自分に微笑む。ピストレーロもレオポルド一味も、誰もがそう思った。

#### 4 くアルフレードとオヤジの絆く

「よう、兄ちゃん。景気悪そうな顔してるなあ…」

時は千九百九十五年七月一日。場所はシエナ市街の横道。I I P alio di Siena（シエナのパリオ祭り）が始まろうという前日。

エンターテイメントで見たような帽子をかぶり、ステッキを手にする中年男は、どこからどうみても、景気だけは良さそうだ。

「hey、ジジイ。馬と騎手をそんなダジャレ姿で見る気かい？」  
アルフレードは精一杯のイヤミをぶつけると、中年男は口角を歪ませる。

「俺の言葉がわからなかったか？ 兄ちゃん。しみったれた面下げで横路に力無く座り込んでどうしたと聞いているんだ」

アルフレードは今度こそ嫌気がさして、地面にツバを吐いた。中年男に吐かなかったのは、そのただならぬ威圧感に負けたからだ。

「消えな、成金野郎」

昔のアルフレードは浮浪者だった。享年十六歳。

「兄ちゃん、何をイライラしてる？ 自分に見向きもしない世間か？ よい子ちゃんの大人達か？」

「みんな……みんなだ！ 俺に見向きもしない世間もよい子ちゃんの大人達も、愛情を一身に受けて『まだ足りない』なんてほざくガキも！ お前も！ みんな！ 全部！ 全部大嫌いだ！ みんな消えろ！ 壊れろ！ 死ねばいい！」

男は、憐れみあわも怒りも浮かべない。アルフレードは続ける。

「俺は、どこかの駅前<sup>あわ</sup>に捨てられてたのを、国家警察が拾ってくれた。でも、せめて一生懸命育てて、それでもダメだったら……はつきり”捨てる”と言ってから捨てて欲しかった。顔も覚えさせず、抱きしめられるぬくもりすら与えず捨てる親が憎かった」

アルフレードは、なんでこんなことを言ってるのだろうと思った。

今日の俺はどうかしてる。

「そして……………一番嫌いなのは自分自身……………か？」

アルフレードは目を見開く。凶星だった。言って欲しかった。お前はバカだと言われてもいいから、かまって欲しかった。

「俺はサルヴァトール。人を見る目は確かなつもりだ。兄ちゃんはパワーが溢れてそうだと思った。簡単に言うとかスカウトだ」

アルフレードは、サルヴァトールと名乗る男を見上げる。漢の目だ。おとこまっすぐで、しかし物悲しそうな目。

「you、一人……………なの……………か？」

サルヴァトールは、深く息を吐く。ただそれだけのことなのに、まるでこの辺一帯の空気が酸欠になったようだ。サルヴァトールは心を洗いたいかもしれない。

「そうかも……………しれんな……………。名刺だ。受け取れ」

サルヴァトールは片手で名刺を渡したが、アルフレードは恭しく受<sup>うやうや</sup>け取る。その時から、既に結果は見えていた。アルフレードの今後の身の振りようが。

去ってゆくサルヴァトールのなんとも悲しいことか。彼は、何を犠牲にしたのか？ 何の罪を背負っているのか？ そんなささいなこと……………いや、他人にはささいではないが、アルフレードには大して問題ではないのだ。

サルヴァトールのささいなことも、アルフレードには気になった。存在感があった。

サルヴァトールは、白いリムジンに乗っていった。

「ようこそ、カンビオヘ！」

サルヴァトールは両手を上げて歓迎する。

「hey、マフィアってマジですか？」

「ああ、武闘派集団だ」

「……………っ！」

言葉を失ったアルフレード。とんでもない所に来てしまったと思っ

た。

サルヴァトーレは続ける。

「これから適性検査をする。もし優秀なら、サラリーマンの平均月収の三倍の月収を払う。悪くはない提案だと思うがな。兄ちゃん、名前は？」

「アルフレード」

アルフレードは、呆然と立ち尽くすのも、混乱するのも却下した。やってやる。

「アルフレード、みんな死ねばいいと、初めて出会った時言ったな？」

「ハイ……」

アルフレードは後悔した。言わなければ良かった。サルヴァトーレに死ねばいいなんて」

「怨恨で人を殺すな。怨恨は捨てろ」

ただ、それだけを言われた。サルヴァトーレは厳しい人だと、アルフレードは思った。いつそ怒ってくれたなら、どんなに楽か……？

結果は、狙撃なら一流になれるという内容だった。

それなら死人の成れの果てを直視しなくても良いかもしれない。

アルフレードは安堵あんどした。

されど……ケネディ大統領の頭が弾けたシーンを思い出す。

一撃で頭が吹っ飛び、隣の女性には癒えることのない傷を作ったかもしれない。

「アルフレード、生きたければ殺せ。死にたい者に用は無い」

一瞬冷酷非情という言葉が出たが、否定した。

「yes、貴方の為に死力を尽くしましょう。オヤジと呼んでよろしいですか？」

「ああ、もちろんだ」

サルヴァトーレは、冷酷なのか……否。肉を食すのは生き物を殺した結果。だから謝肉祭……carnevaleがある。

アルフレードは”確かに生かされた”

しかし、マフィアのボスというのは常に命を狙われている。

それはサルヴァトーレも同じこと。

ミラノのマルペンサ空港で敵にサルヴァトーレが飛行機ごと狙撃された。

手順は簡単。まずはエンジン。動けなかったあと、しばらく経って非難し始める前に燃料タンクを狙撃。爆破。いきなり燃料タンクを狙わなかったのは、標的の大きさの違いだ。

また、狙撃ポイントと思われる二・五キロ先では、味方がコルトⅡガバメントで殺され逃げられた。犯人の顔写真だけを残して。

国家警察の調べが出た時わかったが、どうやら飛行機はSIGブレイサーR93で撃たれたようだ。狙撃範囲は二キロ。狙撃手は超一流だ。

アルフレードはまた一人になった。二十七歳の時だった。

間もなく、アルフレードはピストレーロに入った。もはや、殺し屋以外できないと悟ったからだ。

それに……それに、アルフレードは帰る場所を求めた。

人は何にも無い方が心が強くなれると思っていたが、違った。サルヴァトーレが帰る場所になって初めて知った。帰る場所があると、真に強くなれる。

サルヴァトーレに、アルフレードは様々なことを教わった。それが走馬灯のように流れる。

コルトⅡパイソンをずっと使っていた時のこと。

「使い慣れた古い銃に頼り過ぎず、適度に新しい銃を使うことだ。これは素人がなぜ新しい銃を? と思うが、古い銃はそれだけ悪い銃の可能性がある」

「ah……悪い銃……ですか?」

サルヴァトーレは不適な笑みを浮かべる。

「絶対じゃねえ。コルトⅡパイソンは名銃だ。だがな、考えてみろ。旧コルトⅡパイソンと新コルトⅡパイソンがあるとしたら、どっちを選ぶ？慣れさえあれば、いいっていうのも限度があるのさ」

そして、「恨みは忘れる。無駄な感情は死を呼ぶ。初めてアルフレードが事務所に来た時、『怨恨は捨てろ』と言ったはずだ」と。

「すべて……すべてをオヤジに教えてもらった………これからも………」

アルフレードの苦労話を黙って聞いて、サルバトーレは自分の苦しみは吐き出すことは無かった。体の無数の傷痕きずあとを誇ることも無かった。きつく結んだ口の中を見せずに死んだ漢おとこ。いったいどれだけの苦しみがあったのか？

おちやらけた態度は、部下への慰めなぐさだった。

語るには多すぎる苦労があったんだと思っていた。少しでも、気を楽にして欲しかった。ダジャレみたいなファッションも、仮面だとアルフレードにはわかっていた。

家族より強い絆だったとアルフレードは断言できる。

この世のすべてを敵にまわしても切れない絆。

この世のなによりも大切な家族。

「恩返しもしないのに、なのに俺に棄てて生きろと言うのですか？ この、オヤジに対する気持ちも、想いも、全て………ただ、怨恨から逃れるために………」

アルフレードは思う。いやだ。絶対いやだ。たとえオヤジに背く行為でも、それだけは嫌だ！

アルフレードには見えない敵がいる。殺すべきカタキがいる。

この世界に身を置けば、いずれ……。たとえそれが、サルヴァトーレの意志に背いても……。

## 5 軍人の二重奏（デュオ）

「あら？ アレッシオ大佐ではありませんか？」

シチリア島のボルト・エンベードクルのカフェで、同胞を見かけたラウラ。

「もう昔のことだ。お前は？」

アレッシオはただの礼儀として話をする。相手が女でも男でも態度はいつも変わらない。アレッシオは、サングラスの中から強い警戒心を現す。ちなみに、イタリアンファッションはサングラスが多い。目が太陽光に弱いからだ。

「はっ！ ラウラ少佐です！ 私も”元”ですが」

二人とも、なぜ辞めたかは聞かない。まさか軍人からマフィアに転職したなど言えない。

しかも。ラウラもまた、ただの礼儀で声をかけたただだ。

もし上官に挨拶しなければ、たとえ辞めたと説明しても、無視したことになる。

アレッシオは元イタリア軍大佐だった。

士官学校卒の出世頭で、”金色の獅子”こんじきそれが彼の異名だった。

イタリア軍元少佐であり、敵ピオーヴラの頭領ラウラは、三等兵からの叩き上げだ。

しかし、ラウラはアレッシオに示唆を舐められたことがあった。

同じ軍で、ラウラは上官の元、戦略顧問を任された。

しかし、新しく入った戦略顧問のアレッシオのプランが採用された。

具体的には、ラウラが敵拠点の補給線を断ち、消耗戦をやる作戦。アレッシオは敵を補給線付近以外を包囲。狙撃で敵砲門、及び司令塔、通信室を破壊、もしくは強襲。慌てて被害現場を肉眼で見えた



敵近衛兵を、上手く防御を軽くした脱出口に引き寄せ、空いた大門を封鎖。補給線を断つ。脱出以外は捕虜になるしかなくなるようにする。

しかも、脱出口に対人兵器トラップを仕掛ける。

そして、今回……ピオーヴラの武闘派集団とテロリスト、ウルティマの戦争が勃発した。

場所はシチリア島のアグリジェンド。古代ギリシアの神殿が建ち並ぶ街。さすがに”神殿の谷”には足を踏み入れない。神殿の谷は夜ライトアップされるから、レオポルドは、勝利を手にした。あかつきには、高台から幻想的な風景を見下ろしたいという思惑から、場所を指定したのだろう。そう、レオポルドからの宣戦布告が今回の始まりだった。しかも、三十人のイタリアンマフィアを投入するとまで付け加えた。

「ボス、これは……」

ボスと呼ばれた男はエンツォ。ウルティマのリーダー。戦場に自ら赴き、指揮を執る。戦術はアレッシオ任せだが。

「ああ、FRATELLO（兄弟）。これは罠だ。もし、三十人以上の数をこちらが投入した場合、”ウルティマは卑怯者”と言われる。かといって、三十人以内の手勢を向けても、相手はただ”戦争を引き受けたいちマフィア”レオポルドが手勢を失うわけではない。これが政治家がリーダーという利点だ」

エンツォの言っていることは正しかった。レオポルドがテロリストの頭数を減らす為にピオーヴラとは違う、イタリアンマフィアに小規模な戦いを依頼したのだ。リーダーはピオーヴラのラウラだが。

敵全兵力三十人

レオポルドの腹心ラウラが指揮を執る。

五人を本拠地護衛に。二個分隊（二十人）を使い、両サイドから各一個分隊（十人）で攻め、敵がやむを得ず中央を空けた時、一個分

隊（五人）で奥を攻め、落とす。

対するウルティマは兵力二十五人。戦略顧問に入ったアレッシオの作戦はラウラとは違った。それぞれ一個分隊（五人）を両サイドに配置。敵が分断され次第、二個分隊（十五人）で中央突破を目指した方が良いと言う。その後、両サイドの各一個分隊は後ろに引きながら押されて後退のように仕向け、中間地域に無線スイッチでリモコン式地雷を爆破させる。そして各両サイドの分隊と合流、本陣である拠点を守る、ろうじようする……と。

理由は、敵が王道なら良し。例え戦略の読みに失敗しても、早期に両サイドの敵を前と奥、または前と横から挟み討ちにする。セオリー通りなら、すでに二個分隊を両サイドに分け、少数尖鋭の一個分隊を中央に置いた可能性が高い。敵も攻めいる筈と。

味方はエイジ以外全員ライフルで中々長距離射撃。

アレッシオは中央からH&amp;K G3で敵を狩る。キアラは右側からM16A2で敵を撃つ。アルフレードは左側からゲパルドM1マテリアルで狙撃。

エイジは敵の通信を傍受し、味方に情報を送る。唯一本拠地において、兵力としてはカウントしていない。

一見おかしい点に気がついただろうか？

エイジの無線はウルティマが。敵の無線はエイジが握ってる。なら、エイジと味方の無線は？

答えは、攪乱かくらんのための暗号通信だ。敵の情報は改ざんした。

かくして、集団行動していた者は狙い撃ちにされ、拡散した全軍は、電波を使っただけの通信しかない。しかし、傍受されていることを知らない敵は、場所を特定され殺されたことを理解できた頃には、戦力が三分の一以下だった。

敵は通信を止め、本陣を目指した。

ウルティマは、二人一組でレオポルドがいるはずの本陣に向かう。

レオポルドは、戦略失敗と判断……すでにラウラと一緒に戦場を去った。

「今度はあの三人を連れて来よう」

ラウラは、強く反省していた。

「はっ！ レオポルド様、申し訳ありません」

レオポルドは、ラウラに背を向けてヘリの椅子に体をうずめて空を見ていた。ラウラの声に反応し、横目で一瞥<sup>いちべつ</sup>する。

「いいさ、愛しのラウラ。頭を上げたまえ。勝利のワインを手には神殿の谷を見たかったがね」

——一方ウルティマは——

「ボス、味方の損害は、死傷者六人です」

「FRATELLO（兄弟）、よくやってくれた。死者には冥福を祈ろう。しかし……やられたな」

「はい、敵リーダーの痕跡がありました。断末魔で被害を悟ったのでしょうか。」ウルティマの戦力を減らす”という作戦が叶ったのはレオポルドの方です」

アレッシオの不敗神話にまた一つ、花が咲いた。しかし、散った花もいた。

## 6 恋の交差点 (前書き)

今回は版權モノ ベラ・ノッテが出ます。

## 6 恋の交差点

その日、エイジは花を買いに行った。

縦列駐車が多い。皆目的が同じか？ 挟まれた車はどうするのだろう？

タクシーが路面列車のレーンを逆走する姿も見える。

「キャー！」

「なんだ、なんだ！？」

「おい、人が倒れてるぞ！」

「通り魔だ！」

「おい、こっち来るぞ！」

通り……魔？

まだ肌寒い中、それでも見ると暑苦しい格好。

「トイレで着替えたのか？」

思わず口走る。

「そういうことだ」

その男は、すでに目の前に走り、向かってきた。

ヤバイ。

そう思った時、キラリと光るスペツナズ・ナイフ。

警棒のようにも使用できるナイフで、刺される瞬間。

走馬灯のように、過去の暗い記憶がフラッシュバックした。

お母さん。英二が幼い頃から専業主婦で、毎日描く画用紙いっぱい  
の夢の世界を誉めてくれたお母さん。

なぜ、遠い県外に駆け落ちしたのですか？ 母がない理由がわからない  
小学一年生の春、まるで入学式を見送るのが最後の仕事のよう  
に去ったお母さん。

『ママ、遠くに行っちゃうの？』

『そう、沖縄』

英二は、涙を溜める。

『もう、会えないの?』

『そんなことない。英ちゃんが、画家になったら。……画家になったら画展、観に行く! ……絶対、観に行くから……』

『ホント? 約束の指切り』

英二は、震える手で小指を差し出す。

母も、大きな細い小指を差し出す

『うん、指切りげんま、ウソついたらはりせんぼんのゝます! 指きった!』

「エイジ!」

現実に戻される。空気を切り裂く爆音と金属同士のぶつかり合う甲高い音。

自分の名を呼ぶ女の声。

「キアラ!」

「大丈夫か? エイジ! 何ボサツとしてやがった! ナイフと銃は持たせただろ!」

「あ、ああ……ごめん」

「死んだら謝ることさえできないだろが!」

「大丈夫か!? 君達!」

キアラはハツとする。

「やべ、サツだ! 逃げろ!」

「Festa della donnaなのにな……」

少し落ちこむエイジ。

「あん?」

二人は国家警察……Polizia di Statoを巻ながら走り去る。

「い、いや……なんでも……」

キアラは少し怪訝そうな顔をする。

パトカーの音を聞き、こっそり走り去るフィアットの中を覗いたら、

犯人は捕まっていた。

「さて、犯人は捕まり、殺し稼業のウチらも無事。良かった、良かった！ ……良かったついでに、あたしも買い物付き合うよ」

「ええ！？ いいよっ！ とんでもない！」

両手をブンブン振るエイジに、キアラはヘソを曲げた。

「なんだよ、あたしだって鬼じゃない。無料でボディーガードしようってんだぜ？」

「それは嬉しいけど……あっ」

エイジの視線は固まる。

キアラはその方向を確認すると、そこには花屋があった。

「なんだ？ 花屋ARIE TTA……そよ風か……洒落てるねえ！  
っていうか、エイジは乙女だねーあははっ」

「い、いや……今日は三月八日曜日、Festa della  
donna…男性が女性にミモザの花を贈る日だろ？」

ミモザの花は、黄色で小さな花が菜の花のようだ。

「……なんだよ、彼女なんか作ったのかよ……邪魔したな！」

「邪魔じゃない！ ……邪魔じゃないよ……」

キアラはいよいよ頭に血が上った。

「まさか、彼女に会うまでボディーガード頼む気か？ 調子にのんなよ？」

「っ！ 違っ」

「どう違うってんだ？」

「君に……キアラにプレゼント。ミモザの花を……他の誰でもない。君に……」

エイジは耳まで顔を真っ赤にしてうつむく。

キアラはというと、ハトが機関銃を向けられたような顔をした。

「なっ！？ エイジ……あ、ありがと。嬉しいよ……あたしなんか貰えるとは思ってなかったから」

キアラは、案外嬉しそうに微笑む。

エイジは、こそばゆい幸福感を得ながら微笑み返した。

♪Oh this is the night, it's a  
beautiful night♪

「Bella Notteだ！好きなんだ、これ」

エイジが真っ先に反応する。

「麗しき夜という意味だね？ キアラ」

キアラは、珍しく顔を赤らめて答えの代わりに唄う。

「おお 今宵こそは 麗しき夜<sup>うるわ</sup>」

こんな夜を『ベラ・ノッテ』というんだ

ごらん 空の瞳がきらきらしているよ

この素敵な ベラノッテに

愛しいひとと 肩寄せ合えば

魅惑のときが おとずれる

夜が 魔法をかけてゆくのだ

愛しいひとが そばにいるなら

ああ 今宵の星空の麗しさよ<sup>うつくし</sup>

この素敵な ベラノッテに

おお 今宵こそは 麗しき夜<sup>うるわ</sup>

こんな夜を『ベラ・ノッテ』というんだ♪」

願わくば、この輝かしい一時が、永遠にならんことを……。



## 7 〽休息〽 (前書き)

”休息”では、イタリア個人旅行なので、イタリアに興味無い方は、ネタバレあらずじの章で休息シリーズのカナメのキアーラとの交流を読んでくださいます。

## 7 〽休息〽

エイジは、シチリア島からナポリ行きの飛行機に、キアーラと二人で乗っていた。

――昨夜――

キアーラが、エイジに声をかけた。

「エイジ、一週間休暇取れ」

エイジは突然のことにパニックになった。

「そんな、有給なんかまだもらえないし、長い……」

「有給じゃなくても取れるだろ。上は一週間動かないって言ったから」

「めちゃくちゃだよ……」

「今、ここで死ぬか、一週間休暇取るか選べ」

「休みます。。。休ませていただきます」

「よし！」

「……で、何をするの？」

キアーラは鼻を鳴らす。

「旅行だよ！ イタリア旅行！ 心配すんな、旅費はあたしが出す」

「旅費高いんじゃない？」

「あたしらは殺し稼業だぜ？ 小遣いは、はたけばだせる。エイジ、あんたは特別給料安いんだよ。新人で殺しもしないからなあ」

ちなみに、二千九年一月二十七日午後に一ユーロ百十九・五零円だ。

「あたしの毎月の給料は平均一万ユーロだ。エイジは？」

エイジは哑然となる。

「三千ユーロ……」

キアーラは大げさに呆れる。

「シケてんなあ……旅費は二人で五千ユーロくらいだから気にするな」

「シケてるって、自分から聞いたくせに……」  
キアラは睨む。

「あん？」

エイジは後ずさる。

「いや……でも、なんでそんな気前よいの？ しかも二人だけ」

「……ミモザの花のお礼だよ……」

キアラは聞こえるかどうかほどの声でつぶやく。

「え……？ 今なんて？」

逆ギレするキアラ。

「うるせー！ 女が男を誘ってた。グダグダ言わずエスコートしろ！」

「え、エスコート！？」

「……なんだよ？」

「いや、何も……」

## ●一日目

ナポリ着

エイジは飛行機からナポリを見下ろして口を開く。

「『ナポリを見てから死ね』有名な言葉だね。僕等に言われてるみたい」

「へっ！ なかなか上手いこと言うな！」

二人は空港からAlibusというバスに乗り、ナポリ中央駅に向かった。

まずはナポリのドゥオモ。ここは毎年五月の第一日曜日と九月十九日の祭りの日、大聖堂にある礼拝堂で守護聖人サン・ジェンナーロが”遺した血”が液化……液体の血に変わるという、”奇跡”が起きる。街は喜びに湧く。

続いて国立考古学博物館へ。巨大大理石ブロックや、メノウの浮き彫り、モザイク画、ブロンズ像、日用品、フレスコ画があり、博物館を北に進む。

エイジはモザイク画が気になった。

キアラが首を突っ込む。

「現代の直接技法は、二重直接技法” Double Direct ”とも呼ばれるもので、ガラス繊維でできたメッシュにモザイク：つまりガラスを破片にして直接貼ってゆく技法。モザイクは三次元の表面上で望む向きに合わせて徐々に作られ、最後にメッシュごと、モザイクで飾る予定の面に移す。大きな作業もこの方法で行い、モザイクを貼ったメッシュは運送のために一旦細かく切られ、現地での設置の際に再び組み合わされる。この方法だと、職人はモザイクを貼る現地でなく、快適なスタジオやアトリエで作業ができる。簡単に言うと、鑑賞される角度から美しく観えるように、任意に切ったガラスの破片を貼り付けるってワケ。制作三年、時価一億円の大作もあるそうだ」

エイジはハッとキアラを見る。

「キアラ……詳しいね」

「……ま、ね」

歩くとイタリアの名画を所蔵するイタリア屈指の美術館、国立カポディモンテ美術館にたどり着く。ミケランジェロの”戦士の一群”にエイジは釘付けた。そしてナポリをあとにする。

数時間後の夜、ローマ着

キアラ曰わく。

「永遠の都ローマ、花の都フィレッツェ。イタリアでの滞在に必要なものは『好奇心』だ。

イタリアは常に世界最先端の文化や芸術を提供し続けている。

ルネサンス文化の歴史的遺跡や美術館など観光地はたくさんある」

キアラの口調の変化に、エイジは意表を突かれた。

「キアラ……君は……」

「ガイド。数ヶ月イタリアガイドやって辞めた。趣味の二挺拳銃の

腕を買ってくれたんだ。ボスが」

「じゃあ、『ナポリに来てから死ね』って言葉……」

「……さっさとホテルで寝よう」

(キアラ、君は……)

ホテルに來たは良いものの、キアラはお決まりのジョークを一発。

「変なことしたら殺す」

キアラは妖艶な笑みを浮かべながら拳銃をぶらぶら振る。

「器用な女だ。<sup>ひと</sup>なら、連れ増やせば……」

「余計危険じゃねえか！」

「……相手がね」

キアラは、エイジを睨みつける。

「玉あ無くしたいか？」

「い、いいえ！ 滅相も無い！ お休み」

## ●二日目

まずはコロッセオ。

「いや、いいねえ！ コロッセオ！ イエイ！」

ハシヤギまくつてる女一名。

「キアラなら優勝狙えるかもね」

「馬鹿野郎、剣なんざ使えねえんだよ」

使えたら、やってると言いたげ。エイジはどうにも苦笑するしかない。

「入場できないのがつらいよな……無理やり入るか♪」

「ちよっ……まっ！」

キアラは我が意を得たりと笑う。

「芸術は壊さねえよ」

ホッとしたのもつかの間、バスは次の目的地に向かう。

真実の口広場のあるサンタ・アリア・イン・コスメディン教会。真実の口は、嘘つきは手食べられるっていう言い伝えがある。

六世紀にギリシア人のために建設された教会。ロマネスク様式……つまり、繊細な帯状装飾、念入りに装飾されたファサード（正面）をもつ端正な建築技法が美しい。このロマネスク様式は、十一世紀末から北イタリアを中心に広まったため、この技法は当時珍しかったかもしれない。

「なんであたしがこんなところにいるの？」  
キアラは口を尖らせる。

「キアラの片手食べてもらってみようかな、と」

「悪かったな、ウソつきで」

エイジは笑いかける。

「そんなでもないさ」

「え……？」

「噛み砕いたりほしないうしろ」

「後で覚えてろ」

ヴァチカン市国にてサン・ピエトロ大聖堂鑑賞。

玄関から右に向かう人の流れに乗って少し行くと、大きなガラスに囲まれた聖壇（せいだん）が見えた。人ごみをかき分けて進む。そこで、エイジを先導したキアラは振り返って微笑む。

エイジは、ピエタを発見した。得意気なキアラ。ああ、始まるんだ。キアラの舞台が。

「十字架から降ろされたキリストの遺体を抱く、聖母マリア。ぐつたりと横になる、愛する息子をS字に身体を曲げて抱くその姿は、一人の母だった。」

『ママ、いっちゃうの？』

『画家になったら画展観に行く！』

「エイジ、ガイド始めるぜ！」

再びキアラの声で現実に戻される。

「ミケランジェロ・ブオナローティは、古代の彫刻家を超えた、唯一の御方です。千四百九十八年、彼が二十三歳の若さで彫り上げた

作品です。ミケランジェロは全四体のピエタ像を制作していますが、ふつう、ピエタといえばココ！

さて、マリアの左肩から斜めにかかるリボンをご覧くださいませ。ミケランジェロはあそこにサインを入れています。ミケランジェロの他作品には、サインは無いのです！ 自他ともに認めるこの像を制作するミケランジェロに、神が降りたと言わずして、何をいいましょうか！」

違うよ、キアラ。僕には分かる。

エイジは、頭を振った。

ミケランジェロは、六歳の時に母に先に逝かれた。僕と同じなんだ。だから、ミケランジェロが奇跡を起こしたわけではない。彼は、毎日泣きながら彫った。そこには、芸術も、神も、バチカンもなかった。ミケランジェロは、自分を遺して去った母を泣きながら彫ったんだ。時には優しく、時には激しく愛するように彫った。そこには、芸術家の誇りほこすらなかった。あるのは、母の”亡骸”なきがらだった。

僕もそうだ。描いた。描いて、描いて、描き続けた。それが使命であるかのように。目の前の紙をぐちゃぐちゃに塗りたいぐって、ただ信念の為に描いた。母に認めてもらうため。母に会う為に。

頂上からは、サン・ピエトロ広場が広まる。

結局、エイジはピエタの前で十分間泣きじゃくった。動けなかった。その先右手のクーポラへの登り口に行く。

ミケランジェロが設計した巨大なドームは、クーポラと呼ばれ、存在感は観る者を圧倒する。内側壁には、モザイク画が一面にある。壮大な空間はひんやりと涼しい。

「ごめん」

キアラは、珍しくしおらしかった。

「何が？」

今回ばかりは、睨むエイジ。

「絵、彫刻。考えてみたら、エイジは美術留学生だったな。……………  
…夢、捨てたんだよね？ あたし達に巻き込まれて」

エイジは、ひとしきり大きく息を吐く。

「仕方ないさ。君たちについていかなかったら、死んでたかもしれない。命あつての物種だ」

キアーラは、クーポラの頂上から景色を眺める。

「宝物殿、行ってみるか？」

気分転換のために出た言葉は、お宝だった。

「ぷっ……そうだね。観たらLa Campanaに行こう。ローマ料理食べよう」

「”トリッパ”が人気だぜ」

キアーラはエイジを引っ張った。

ここはスペイン広場。あの有名な映画のシーンが撮影された場所。飲食禁止でソフトクリーム屋は無い。

そしてトレヴィの泉。願いが叶うとされている場所。

もう夕方だが、白い像と遺跡のような建物。

「トレヴィとは、”三叉路”の意味で、この前から三本の道が延びてるのが由縁。さっ！ 噴水に背を向けてコイン投げよう！」

「いくつ？」

エイジの無神経な言動にムツときたキアーラは、「テキトー」と言っ  
って二枚なげた。

ちなみに、二枚は恋が成就。する

そしてローマ発一時間後ベネチア着。

ベネチアに一泊した。



## 8 〽休息2〽

エイジはホテルでイタ車を熱心に語っていた。イタ車とは、イタリア産の車のことで、フェラーリなどがその代表格。フェラーリショップで買ったTシャツにホテルで着替えると、夕方であるはずなのに逆にエイジの目が覚め、キアーラは呆然としていた。

「あのアキハバラにもイタシャあるだろ？」

キアーラは、わざと興奮に水をさして話を切り上げる方向に來た。さすがに、自分からイタリア旅行に誘って、話の肴を取り上げるのも気が引けたから、食欲を減らすワケだ。（つーか、あの泣き顔はどこに行った……？）

「ああ、痛車ね」

へこんだか！？ と内心ほくそ笑むキアーラに対し……

「僕、見たけど可愛いよ！ キアーラにも見せてやりたいな〜♪」  
喜んだ。（隠れヲタクだったか……）

キアーラの方がへこんだ。

「ふふっ……」

エイジは、キアーラを見て笑う。キアーラは顔に出やすいから、作戦バレバレだった。

「なんだよ？」

キアーラは不満気に聞き返す。

「いやね。イタリアって面白い国だなあって」

「なんで？」

キアーラはキョトンとする。

「朱いレンガの上に太陽発電機とテレビアンテナだよ？」

「文化と文明の街だ。日本だって城の中にライトアップ用の照明器具あるし。文化遺産の姫路城だっけ？ エイジが写真くれたの。しかも、全面建て直したって……」

それを聞いたエイジは、なるほどと納得する。

「根元は変わらない……か。それにしても、イタリアのサラダにはビックリしたよ。量が多い！」

「軽食みたいだよな」

キアラも、機嫌が治ったようだ。

このキアラやアルフレードを見ればわかるが、イタリアーノは陽気でフレンドリーだ。そんなことも言ったら、キアラにソッポ向かれてしまうだろう。

繕うように話しを変えるエイジ。

「教会って、みな日の出を背にしてるので、夕日の映える教会の風景は見られないのは知らなかった」

「日本は他教徒社会だからな」

そんな文化の会話をして、一晚飲み明かすと言うキアラをなだめてエイジは寝室に入った。

### ●三日目

ベネチアをゴンドラで40分一周する。

”Servizio Gondole”のグリーンの看板を目印にサン・マルコ広場をあるく二人。

「ここは緑が多いね！」

エイジはやけにハイテンションだ。

サン・マルコ広場前のサン・マルコ寺院は天井にはモザイクで飾られたドーム型の屋根がある。このような建築技法をビザンチン様式という。

”ゴンドリーゼ”と呼ばれる船主を一人選び、サン・マルコ運河へ向かう。広々としたこの運河は、サン・ジョルジョ・マツジョーレ教会を望める。三角錐の屋根が特徴の搭と、四角い白い建物が美しい。

次はサン・モイゼ小運河。ホテル・バウアーの横から入る。するとどうだろう、ゴンドラの揺れが少なく静かになった。

続いてフェニーチェ劇場横には、カーブミラーがある。住宅街は、洗濯物をヒモで吊してある。中国みたいだ。

そして大運河。大運河沿いには歴史的建造物もあり、陸とは違った雰囲気だ。

さて、リアルト橋に到着。観光客で賑わうここは、大運河の象徴的存在。

最後にリアルト橋を右折するとフォンテゴ小運河へ。映画にも登場した溜息の橋が近づき、ゴール！

一周した。

「キアラ、無口だったね」

「アハハッあたしの家の近くでセンチになっちゃった。エイジが移ったなあ」

「黙ってりゃ可愛いんだよな」

キアラは、怒り笑いだした。

「器用なやつ」

「うっせ！」

ピサに列車で移動してピサに宿泊したエイジとキアラ。

#### ●四日目

ピサの斜塔観光が目的でピサ中央駅に着いた。

キアラが気まずそうにエイジに聞く

「美術館、行かないかな？」

「いこ！ 予定狂うだろ？ それに、ピエタの時は特別。」

ドウオモ広場まで歩いて行く。

すがすがしい緑の広がるドウオモ広場を訪れると、海運国とは思えない。しかし、それで巨万の富を得た十世紀頃から芸術が花開いたのは納得できる。

しかししかし、十四世紀にはフィレンツェの植民地になり、かつての港は砂に埋もれた。

「ここでガリレオ・ガリレイが落下の法則を実験したんだね？」

エイジは、ガリレオには興味があるらしい。

「してないぜ」

「……は？」

「だからしてねえんだよ」

キアーラはしれっと答える。

「じゃ、ピサ大学で学び、若くして教鞭きょうべんを振るったのは？」

「それはホント」

そんな、さりげなく夢を壊されつつピサの斜塔を二百九十三段登って行く。

「スゲーいい眺めだな！」

「はっ……はっ……はっ……す、……ごい……ね……」

エイジは死にそうな顔をしているが、キアーラははしゃいでる。

「斜めってというのがコエゝな」

「……怖く……ないだろ」

「バレち？」

エイジは、キアーラの変わり様が気になった。焦っているような、喜んでいるような。

蒼空に白い大理石の壁を輝かせる様は、まさに”絶景かな”である。

「ここはな、”奇跡の広場”って呼ばれてるんだ」

「イタリアには奇跡がいっぱいだな」

「あたしが、ガラにもなくガイドなんかやってたのは、世界中に奇跡を見せたかったからさ」

そう言って振り向く姿は、生娘のように幼げに、初々しく、そして美しかった。

だから。

なぜ、テロ組織に関わる？ とはまさか聞けなかった。聞いたたら、純真無垢なキアーラが野獣に戻りそうだったから。

「この旅行は本当に楽しい」

キアーラは飛び跳ねる。

「本当か!？」

「うん、キアーラの優しい所いっぱい見れた」

キアーラは赤面してうつむく。

「……し……」

エイジは、小首を傾げて聞く

「ん？」

「……うゝ……もし、ココから落ちたら楽しそうだなあ……」  
前言撤回。キアーラは小悪魔だ。

カプリ島に行く船乗り場に行く電車の出発駅前に泊まった。

## 9 告白

### ●旅行五日目

カプリ島に到着

ケーブルカーFunicolareで港へ

港前のホテルに一泊。

「あのさあ、エイジ」

キアラはエイジの部屋に上がってベッドに腰掛ける。

「なんか、忘れてない？」

エイジは一瞬地獄を観に行く方が容易そうなメチャクチャな妄想をしてボケる。

「お土産？ は買ったし……なあ？」

「なあ……？ って、逝け！」

扉は乱暴に閉じられ、静寂が残る。

「まさか、ね……」

### ●六日目

青の洞窟観光。

「この島は、治安悪いから、気をつけろよ」

「発砲されるのか？」

「いや、スリだ。お前、日本人だからいいカモだ」

「なら、手つなごうか？」

「え……？」

「イタリア人と手つないでたら、現地人に見える」

「それはそうかもしれないけど……あたしなんかと手つないで嫌じゃない？」

「嫌じゃないよ。当たり前じゃないか」

「……よ……いいよ……」

（キアラ……やっぱり）

カプリ島の名物の青い洞窟は、” Grotta Azzurra ”

グロッタ・アッズラ

といい、浸食でできた洞窟内に光が差し込むと、白い岩肌に光が反射し、そこから蒼が湧き上がる。

島到着後、すぐ入らなかった理由は、青の洞窟は光の反射によって見られる現象のため。だから、キアラは十一時に入れるようにした。

「ホントに綺麗だね”洞窟”が」

「悪かったな、綺麗な女じゃなくて」

「ねえ、キアラ……彼女になってくれるかな？」

エイジは、天井は青黒く、下は青い神秘的な世界で、夢を唄うようにお願いした。

「……？ ちょっ！？ バッ！ 正気！？」

「うん。ダメ……かな？」

一瞬の静寂が永遠のように感じられる中、キアラはゆっくりと口を開く。

「いいわよ……」

「わよ？」

予想外の言葉使いに、エイジは思わず聞き返す。

「ちょつまっイヤ！？ これはその……」

キアラはあたふたして、腕をブンブン振って赤面する。

「かわいい」

エイジの頬が景気のいい音をたてる。

「痛い……」

「調子に乗るからだ。……んっ……」  
キス……。

「愛してるよ、キアラ」

「あたしも……」

「キアラ……」

「ん？」

「最初は殺し、ためらった？」

今なら聞ける筈だ。<sup>はず</sup>完全なる少女と化した今なら、本心を余すことなく……。キアーラの心に浸透してしまった毒を、人殺しという名の毒を抜いてやりたくなった。

そう、エイジは興味本位で聞いたわけではない。殺し屋稼業、人殺した怖さなど語れない。愚痴をこぼしてはいけないのだ。エイジは、殺しはしてない。だが、肌が痛むくらい感じるのだ。無言の空気が重いのだ。

エイジは、キアーラを抱きしめた。船の上で、蒼の中、孤独にならないように、そっと抱きしめた。

「……ああ、ためらった。本当にこの人は悪人なのか？ いや、あたしの価値観では悪人だけど、殺すほど悪人なのか？ 引き金は、今までの何よりも重かった。相手はアレッシオが半殺しにしたから、あたしが攻撃されることはない……それがアレッシオの”殺しのさせ方”だった。一度殺したら、もう次はためらわなかった。アレッシオは、なかなか策師だね。でも、エイジは殺さず組織の力になってる。あたしはそこが好き。殺人鬼から、女の子に戻してくれた。エイジは？」

「君の美貌と真っ直ぐな所」

キアーラは微笑んだ。

「あたしも、一目惚れかもね」

その後、エイジとキアーラはソラーロ山を登り、高さ五百八十九メートルからの景色を眺めた。

島を見下ろしてのディープキス。血と硝煙の匂いすらかき消し、人脂が焦げ、砂塵と帰す思い出を追い出だす。脳の痺れるような思いを、恋の麻薬を注射されるキアーラ。その麻薬は世界中のどんな”ヤク”より強烈だ。初めて女に生まれて良かったと思った一日だ。



「つたく、エイジはとれゝな」

――三十分前――

「おいっ！ 荷物！」

イタリアでは無料の公衆トイレは厳禁。特にナポリやシチリアだ。それをエイジは破った。急に用を足したくなって。

「スリか！？」

言うが早いか、銃声とどろが轟く。

「おい、命か、バックか……どっちか置いてけ」

一瞬選択肢のように聞こえるが、命を置いていって荷物を持ってい  
くことはかなわない。

「し、失礼しました！」

スリはさっさと去った。

一応、日本のように無料の公衆トイレもイタリアやフランスにはあ  
る。

しかし治安上、地元の人さえ普段利用しない。

有料、無料関係なくトイレは盗難、犯罪の起こりやすい場所とい  
うところはある。

観光スポット周辺には、有人の監視人のいるトイレや、ユーロ貨幣  
を投入すると入場できるトイレなどがある。

美術館や遺跡内などの公共施設なら、トイレは無料で利用できる。

キアラ達もやったが、二人での行動なら、ひとりひとり順番にト  
イレを利用する。トイレを使う場合には、一言ことわっておいた。

キアラ曰わく「ちよつと恥ずかしかった……」

膨れつつらになる。素直な所がキアラの良い所だと、エイジは思  
った。

観光スポットの周辺に有料トイレは点在している。

有料トイレは、1ユーロ前後の値段。都市部だとやや割高になる傾  
向。

キアーラとエイジが翌日出勤すると、みんなで「ヒュ〜ヒュ〜」言いながらエイジに親指を立てる。

「バッチリ犯したか？」

「あたしがやられるか、馬鹿野郎共！　ぶっ殺す！」

アレッシオが落胆する。

「俺の負けだ」

アルフレードは両手を上げて弁明する。

「賭けてない、賭けてない！　賭けにならねえだろ！」

キアーラは手をかけた二挺拳銃のグリップを離す。

賑やかな日常が、また始まる。

それは予想し得ない未来という名の運命の渦。

あの日、皆は確かに笑ったと言える日を送るのが精一杯だった。

## 10 狙撃交わる刻

エイジとアルフレードは、ローマに来了。ここは夏は夜の八時でも明るい。季節は春……三月最終日曜日である三月二十二日、午前二時が午前三時へ。夏時間（l'ora legale estiva）の開始である。

「こんな障害物がある建物の屋上から狙撃するのか？」  
エイジは当然の疑問をアルフレードに聞く。

「hey、”狙撃は高い所から”というのは素人の考えだぜ、Baby！ 広い視野が確保できるが、高過ぎると射撃の難易度を上げてしまうってわけよ！」

アルフレードは、狙撃ポイントを中くらいの建物の屋上にした。木を隠すなら森の中。

建物の屋上にいるスナイパーには、屋上で逆スナイプの作戦だ。

「なんで高い所はダメなんだ？ それにこんな遠い……」

「チツチツチ……下向きの射撃では、重力が弾道に及ぼす影響が強くなるから、長距離になるほど誤差は大きい。敵さんは、以前ゴルフ場にいる左翼政治家を殺したヤツかもしれない。」

hey、なんでこんな作戦予定日前日に目標から二キロも離れた街をぶらついてるかわかるかい？」

「二キロ先からっていうのは、目標を撃つ敵から離れるため。前日は下見、か？ いきなり駆り出されて迷惑だよ……スナイパーは一人なんだろう？」

「ガッデム！ 人をイカれポンチと思ってくれるなよ！ 半分は当たってる。敵さんはゴルフ場の目標を狙撃したと言ったよな？」

つまり超長距離狙撃が可能な一流のスナイパーがいる。そして……今回エイジにハッキングしてもらった情報の目標は重要な左翼政治家だ。おそらく、ゲパードM1アンチマテリアル・ライフル クラスの長距離スナイパーライフルクラス。こちらは失敗できないから、

連射に長けたSIGブレイザーR93を使う。エイジ、てめえには観測手になってもらう」

流れる風が冷たい。狙撃手は、仕事中は常に孤独という。それがどういうことか、わかるのか……？

「淋しいのか？　ぷっ……」

アルフレードは、顔を真っ赤にする。

「bat！　ちげえよ！　通常、狙撃は二人一組。必ずしも目標が予定の場所に来ない時、銃口はそのまま、視界を広げる時、目の代わりが観測手だ！」

「ごめんごめん、よくわからなくて。で、今は観測手の役割なのかい？」

「今は風見だ。射撃は風の影響を受けやすい。ビル風が多いと細かく風を読む必要がある。だが、風見鶏なんか立ってないから自分で調達するって寸法さ。エイジにも付き合ってもらうぜ」

「旗や梢（しほ）とかか？」

「yes！　あの布とかな。見方は、プリンターのヘッドと同じように目を細かく動かす。視界の左上から見て一文字ずつ刻んでいくように、一定感覚で右、右……と動かす。目の焦点を遠近交互にずらすのがコツだ。遠くを見た後は近くに、近くを見たあとは遠くに、視線をずらすたびに焦点を左から右に。低い風見は違う。車風に揺れるからな」

「キアラ達にも手伝わしたあるのか？」

「ah：いや、キアラはおつかねえしなあ……アレッシオはボスだしなあ……」

アルフレードは苦笑いしてエイジを見る。

「てめえはパシリだからな！」

「なんだそりゃ!？」

エイジは「ビックリだ!」と、ツツコミながら歩いた。

その後、距離と角度、風に予想される時間による太陽の位置から一点に絞った。

天候快晴。湿度二十％、南西の微風……およそ毎時八キロ。狙撃に絶好の日だ。

「アルフレード、三つもレンズあったら敵に見つかるんじゃないか？」

エイジは当然と思える疑問を口にする。

「no。ここは太陽の日陰……つまり敵さんにとって逆光になる。万が一の時は、互いに撃ち合うことになる。太陽を背にした方が有利だ」

「そうか……僕も準備する」

エイジは三脚架付きの観測スコープを準備する。

アルフレードはSIGブレイザーR93を設置。伏せ撃ちの体制をとる。この銃は機能性重視だ。無骨な銃身をひと撫でし、フォアエンドの先端のバイポッドを展開。次に、ストックを抱いたままうつぶせの体制をとる。

肩辺りにストックの底を可動式のチークパットに頬をそれぞれ押し付けて固定し、床に当たる高さを調整する。

アルフレードとSIGブレイザーがそれぞれ同化する。

太陽を見、スコープに陽が差し込まないことを確認する。

その後スコープのキャップを外す。エイジはマガジンを差し出すと、アルフレードはうつぶせのまま無言で受け取る。

・308口径ライフル弾……レクシティⅡマッチM852。競技用に作られた特殊弾をつかう。

マガジンを差し込み、ボルトをスライドさせると、初弾がイヤンバーの中へと送り込まれる。

狙撃手はやはり孤独なのだ。それは観測手がいても変わらない。ライフルを構える自分だけが独り、この空と大地の中間に取り残された感覚。人も街も霞んで見え、肉眼では狙撃ポイントなど見える筈もない。

だが、レオポルドの望遠狙撃スコープを覗きこめば、遠い世界は突

然近くなる。

スナイパーにとって、世界と自分の繋がりはこの一点のみ。

このスコープの中の世界のみが現実なのだ。いや、現実を超越した世界かもしれない。

……それにしても。

「エイジ、人影がない。おかしい。ちょっと周りの建物を見てくれないか？」

「わかった」

目算を誤ったか？　まずい。任務開始時刻まであと十分……

『来た！』

エイジとアルフレードは同時に叫んだ。

「どうやらギリギリまで粘って逆スナイプの敵を攪乱かくらんさせるつもりだったようだな……」

アルフレードはいつになく真面目な口調だ。

「もの影に隠れたね……でも、頭は見えてる」

「a……」

「どうした？アルフレード」

「……いがいない」

「え？」

「間違いない……ヤツはシモーネ！」

「シモーネ？　知り合いが目標なのか？」

「no……カタキだ。オヤジのカタキだ。」

「……まずい。そろそろ時間だ。カタキなら撃て！　アルフレード」

「ヤツが……目の前に……」

そうだ、カタキなら一石二鳥じゃないか。今こそ……！

轟音が鳴り響く。SIGブレーザーの一撃は、シモーネのわずか後方に消える。

優れたスナイパーは、“外れるような弾を撃たない”のが一流の鉄則だ。自らの技術を把握し、状況を“風を読むように”秤はかりにかける。

命中を確信して弾を撃つ。

しかし、アルフレードが、外した。エイジは薄ら寒いものを感じた。これがカタキを前にした男の姿。

しかし、アルフレードはエイジが思ってるよりは冷静だった。

アルフレードは、ライフルのボルトをスライドさせる。引き開けたボルトから、弾き出される。空莖莖と鉄くろがねが舞うと、直線動作で第二弾を装填する。

シモーネとアルフレード、どちらが早いか銃口を向ける。

シモーネの驚愕きょうがくに歪む顔は、獲物と化した、いずれ死ぬ運命の敵！二つの銃声が重なった刹那せつな、エイジ側の側頭部が殴られたような衝撃を食らった。風圧で倒れる。

「エイジ！ 俺がついていながら！」

アルフレードは即座に生存確認をする。側頭部にかすり傷ができた。

「大丈夫。敵は？」

「oh……待ってろ」

シモーネは倒れてる。

「ok、任務完了。帰ろう」

カタキ撃ちとは虚むじなしいものだ、アルフレードは思った。

## 11 蜘蛛女対蜘蛛男

シチリア島モンレアーレ。ピストレーロの事務所があるウンベルト通り沿いに、不審者がいた。バンダナをしたロングスカートメイド。カチューシャじゃないのか？ とツツコミたくなるが、それもまた見当違いのツツコミだ。もちろん正体はピオーヴラの蜘蛛女、ペトルーシユカ。彼女曰わく、正装はカチューシャ、プライベートはバンダナらしい。とりあえず服装の観察は止めよう。頭が痛くなる。蜘蛛メイドは、ウンベルト通り沿いのモンテ教会の近くに引越した。

ウルティマの組織の一つを潰す気なのだ。

五月になると、いよいよ暑くなる季節である。蜘蛛メイドは、自室でチャイナ蜘蛛に変身した。

五千ユーロの自作ハイスペックPCを運び込むと、ピストレーロのメンバーと仕事の予定をハッキングにかかる。気分もチャイニーズのまま。

このPCは、経費で落とす気だったが、係員に怒鳴られ、ラウラに泣きついて半額ラウラに出してもらった大切なPCだ。

スペックは、

●CPU…Intel 2個xCore 2 Extreme 3.20GHz ●MEMORY…6GB ●HDD…2TB (2000Gのこと) 7200rpm 8M ハードディスク ●グラフィックス…1GB ●FDD…24-in-1 (+15) カードリーダー&FDD USB 2.0 ●DRIVE…DVDスーパーマルチ ●POW ER…電源 (静音) 650W

だ。

敵は日本人……リーベンレン (中国語で日本人) 不是那樣! (間違いない!)

ペトルーシユカの祖父が中国人だった。日本人に第二次世界大戦で



殺された。

ちょうど良いと、ペトルーシユカは思った。すでにウルティマの二つの組織を解体した力を見せ、日本人に泡をふかせてやる。

蜘蛛女の力は、敵の機械が自機にアクセスするとフリーズして破壊する

エイジは、組織の記録一切がっさい荒らされ、消されたPCを分析し、フリーズを阻止するワクチンソフトを作った。

エイジは運が良かった。ペトルーシユカがハッキングを行っている間、一部始終を見て追ってたからだ。エイジは防御型より、攻撃型だった。出来る限り”観察”するべきだったのだ。その上で、密かに他のウルティマの電脳戦を得意とする者と協力する必要があったからだ。

しかし、問題は落ち合い方だ。エイジはネット喫茶から、ソフトウェアから起動するハッキングソフト……”ポータブルアプリケーション”でコンピューターにインストールすることなく、仲間に”ハッキング”して連絡した。

ペトルーシユカは、他組織からのハッキングだと思って無視した。見事エイジ達はハッキングした瞬間に伝染するウイルスソフトを開発。ペトルーシユカをおびき寄せる。幸い、次の任務の前日に”偽の情報”をながした。次の任務は、来週に持ち越せば良い。アレッシオがボスの所に行つて話の顛末<sup>てんまつ</sup>を伝えに行つた。さすがのペトルーシユカも、発信機や盗聴器は仕掛けられなかった。

罠の当日、ペトルーシユカは正装のメイド服で（今回は運動する可能性あるから、ミニスカメイド。事故で○○なことが！？）シチリア島タオルミーナのTimeoというホテルで、銃撃戦になった。たまらずペトルーシユカは、逃げながら遠隔操作してウイルスソフトを起動。ピストレーロの通信機を攻撃、盗聴する。

敵の居場所も判明した。建物内の地図も展開。防御の薄い通路をた

まに突撃銃、AK-74を使い、現れた敵や追う敵を5・45ミリ  
＊39ロシアン弾で、なぎ倒す。仲間を呼び出し、来ると連絡した  
増援に対しても、用心を重ね暗号メールにしたのがいけなかった。  
音声くらい聴けばあるいは……。

逆に情報はウルティマに。返事も武器の指示以外はそのまま呑んだ。  
武器は、突撃銃、AK-74とショットガン、ベネリM3 スーパ  
ー90しか使えないのだ。しかし、武装も知られてる。故に、倒し  
た敵は三人ほど。何人残っているかもわからない。

しかも、さらなる悪夢がペトルーシユカを襲う。地図は合っている  
が、ここ数分敵の配置が違う。盗聴も妨害された。

退路を閉ざされ追い詰められたペトリューシユカは、AK-74を  
盾替わりに連射し、弾幕をはり、明らかに敵がいる障害物をショッ  
トガン、ベネリM3 スーパー90で攻撃する。一人でやってると  
は思えないコンビネーションだ。

「あの女、電腦戦だけじゃねえのか!？」

アレッシオは、建物の影に隠れ、突撃銃から逃れる。

そしてエイジに大量に持たせたミラーを使って言った。

「AK-74は弾切れになった時が頃合いだ。弾幕が消えた一瞬を  
狙って適当に当てれば、いつか敵は手傷を負う。そこを狙う! 女  
は、銃しか出さないでデタラメに撃ってる。

「アルフレード、AK-74を頼んだ!」

そして、硝煙が消えた時、アルフレードのAUGの五・五六ミリレ  
ミントン高速弾が跳び、AK-74が壊れる。

ペトルーシユカはもはやこれまで。ならばエイジを道連れにしよう  
とエイジを挑発する。

「英二という日本人はいるか!？」

即座に反応したのはキアラだった。自分の男がご指名でご機嫌に

なるような女じゃない。

「いねえよ、そんな役立たず！ 戦闘に慣れてない」

「当たり前だ！ 私のような、容姿端麗、才色兼備、文武両道の完璧超人がそうそういるか！？」

「さりげなく自慢した！？ しかも論点がズレてる！？」

なんと、反応したのはアレッシオだった。

普段クールガイで通っているアレッシオだが、実はヒートガイだったことに気付くには、少々時間がある。

しかし、即席お笑いコンビに、見事惨敗したアレッシオの悔しさは語るに語り尽くせない。

エイジが反応しなかったのは、日本人はお笑いが流行っても、意外に笑わないからかもしれない。

アメリカは笑わない所で笑い、番組中ずっと笑ってる国。日本はお笑い芸人の笑わせる所で我慢する番組がある違いだ。

イタリア人は、明るくユーモアで通っているから、アレッシオの反応には理解できるため、皆笑いをこらえる。

アルフレード以外は皆根は真面目なので、あまり笑いは起こらず再び緊張感がもどる。

キアーラは、エイジを守りたいと言ってエイジに出ないように忠告する。

アレッシオは、キアーラにニヤリと微笑んだ。

「戦争の女神の慈悲をくれてやれ」

「オーケイ、あたしはこんな隠れてちまちま撃ってんのは趣味じゃないんだよ！」

キアーラは向かい合って決闘。

「エイジと戦いたかったら、あたしを倒すんだな」

キアーラは体を倒して敵の体の周りに二丁拳銃を乱射。ペトルーシユカを動けなくする。

自動的にペトルーシユカは仁王立ちしてキアーラの転倒予測地点に

照準を合わせ発砲。キアラは脚を踏ん張って一瞬転倒速度を減速、そのまま横に回転するように動きつつ敵の頭と心臓を狙い撃つ。

「痛い！ ちょっと横腹に浅く当たった」

「キアラ！」

エイジをたしなめる。

多少着弾誤差があったが敵は倒す。ペトルーシユカは声を上げる暇もなく絶命した。

「ちきしょう、かすった！」

さすがのキアラも、完全にはよけられなかった。出血はそれほどでもないが、ほおつとくとまずいくらいだった。

しかし、今回のエイジの働きは、ウルティマの面々に広く広がった。

「ペトリューシユが、死んだ！？ そんな……」

部下の報告に驚きを隠せないラウラは、復讐を誓った。

## 12 〈復讐と怨恨〉

エンツォに電子メールが届いた。

敵から、敵No.3 蜘蛛女の命を奪った者と果たし合いをしたい。  
という内容だ。

アレッシオは、ボスに呼び出される。

「確か、お前さん達だな？ コードネーム蜘蛛女を倒したのは」

「はい、今回は俺が行きましょう。みすみす部下を危険にさらすのは忍びない」

「わかった。行け」

エンツォは答えは予想できたようだ。

アレッシオは、古い人間だった。仁義を貫く者。部下の命を短くする作戦はせず、濡れ衣を着てでも、部下の為に走る。

それは、月明かりの加護を受けた殺し屋

「死ぬなよ？」

「もちろんです。ボス」

夜、月明かりだけが頼りの田舎町をラウラが決闘の場所を選んだのは、邪魔が入らないため。

「あ、あんたが……そうか、またしても貴様か!？」

ラウラは狼女よろしく八重歯をむき出しにする。

「どうせあなたは戦略だけが能の将校さんだと思ってた。でも、私にかなうかしら？」

「悪いが俺には、お前は自信家に見えるがな。」

「……っ！ なめやがって！ なら、私の指定した闘い方で勝者を決めようじゃないか！ それとも、怖くてそんな条件嫌かしら？」

「……いいだろう。かかってきな、クソアマ。」

「……っ！ 言ってくれるじゃないか！ 早撃ち勝負だ！ 負けたら死ぬ。いいね？」

「ああ、了解した」  
(せいぜい吠え面かきな)

静まり返った夜、全てを飲み込む闇。

ラウラの獲物はS & a m p; W M 5 9 0 6。実射性能ではトップクラス。重量約千グラム。

アレッシオの獲物はベレッタM 7 5 R。

……果たしてその結果は……？

銃声は三つ。アレッシオ自慢の三点バーストが死の礫ひょうていを立て続けに放つ。

「な……？」

ラウラは倒れ、顔は驚愕を露わにした。汚い女だと、アレッシオは思った。

「早撃ちは、眼で見ると、一番大切なものを見逃す。c i a o d o n n a (グッバイ、レディ) 冷静さを欠いたのはあんただったらしいな」

アレッシオは挑発に乗ったフリをただけだった。

アレッシオはサングラスをかけ、人差し指と中指でかけ直し、愛煙のセブンスターに火をつける。

「ラウラ……私のラウラを……？」

レオポルドはスパイからの連絡を聞く。

深い悲しみに堕ちた。

レオポルドは考えを巡らせた。もういい。せめてイタリアンマフィア、ピオーヴラがボスを失ってチリジリになる前に、双鬼を呼び出し、指揮系統を任せ、全軍を持ってウルティマを潰しにかかる。その後は別のイタリアンマフィアを使えば良い。

時は、最終章へ。

### 13 決戦の狭間で

二千九年、六月十九日金曜日、午前九時。アレッシオ達はウルティマのボス、エンツォの指示を受けていた。

まさに、今、決戦の時だとも言われた。目標はレオポルド邸内のレオポルド。

「国家警察はこう考えるだろう。『圧力をかけてくる右翼政治家の同胞は殺せない。しかし、”事故”はおこる。しかも、今回の作戦規模は極めてデカイ。ならば……右翼とテロリストを交戦させ、互いが疲弊した所でテロリストを一網打尽にする。右翼は”事故”でさなる被害がでる。』と。なら、簡単だ。”ウチが疲弊しなければ良い”」

部下達は、士気が高まる。

エンツォは愛銃コルトⅡガバメントを掲げて続ける。

「F R A T E L L O（兄弟）、一二〇〇時より、戦争だ！ 任務完了した暁には<sup>あかつき</sup>vin<sup>ワイン</sup>oだ！」

コルトを青空に発砲。45ACP弾が空高く舞う。これは未来を示していると思わずにはいられない。

『サー！』

皆、血が沸き立つ。

エンツォは、ピストレローロに指示を出す。

「お前さん達には話してなかったが、お前さん達の部隊は少数尖鋭の部隊でな。今回、敵さん<sup>やつし</sup>は数で勝負するらしい。それぞれには全員の部隊長として戦ってもらう。

エイジ、お前さんはまだウチに来てまだ半年……あと一年、二年は指揮官にはできん。だが、有能だから俺はお前さんの名を知ってる。仲間の誰かを支援してやれ」

「はい！」

エイジは心の中でガッツポーズをとった。

アルフレード率いる十人のスナイパーは、敵のボス、レオポルドのいる部屋の強化ガラスの一点、上から二番目の、右から二番目の窓のサンのクロスポイントを一斉に狙撃。一瞬でガラスを割り、振り向こうと体をひねり、懐<sup>ふところ</sup>からAMTモデル・バックアップ？を取り出す前にレオポルドの額の下真ん中をアルフレードがぶち抜いた。普段から護身用の小型拳銃を懐に入れ、生き延びられると思っていたのか？　ならば、考えが甘い。

キアーラは二挺拳銃を唸らせ最前線へ。

敵No. 1、双鬼を倒しに。

獲物は、H & amp; K MK23とスミス & amp; ウェッソンM29。MK23は去年末に手に入れた。カスタムガン並みの性能。M29はスミス & amp; ウェッソンM29：四十四口径のマグナム・リボルバー。

敵は、すでにボスの死を知り撤退し始めたが、周りをウルティマの猛者達に囲まれた双鬼以下複数の敵は、ウルティマを叩き、無理やりこの屋敷を脱出するしかない。

「僕も行く！」

「ついてくんな！」

エイジは譲らない。

「嫌だ！」

「私の命令が、聞けないか！？　エイジ！」

「でも……それでもキアーラと行きたい。キアーラのいない世の中で、行き残りたくない！」

「エイジ……来な！」

「うん！」

エイジとキアーラに誘導され、一番隊が戦うが、仲間の発信機の数



の重なり具合が異常に多い。何か、ある。

仲間の減り具合の多い場所に、キアラと救出志願者を五人選んで向かう。が、そこにはとんでもない罠があった。

エイジと、それを守るキアラだけが残る。

そう、そこには逃げ遅れた双子がいた。

双鬼と向かい合う。

ガエターノはH&Amp;K P7M13：新型の警察用拳銃を求めるニーズに応じて開発された銃を二挺。

チェーザレはベレッタM92FS：米軍に制式採用された銃を二挺。四の銃口の脅威をこれほどまで恐れたことを、キアラは経験しなかった。

キアラは、仲間の介抱の為二挺拳銃をホルスターに戻していて、銃を抜く前に双鬼に攻撃される。

しかし、キアラは二人とはいえ息のあった敵の呼吸と姿勢の読み取って虚をついた。かろうじて銃を抜いたキアラは続けて連射するが、二人はかろうじてよけ、対照的に肩を撃たただけだった。しかし十分。二挺拳銃使いの片手を封じたのだから。

キアラに向けられる二つの銃口は、見当違いの場所に着弾する。

「へっ！ とんだハッターだな」

油断は死を呼ぶ陰の餌と、キアラとてわからないわけではなかった。

しかし、”キアラは油断した”それがキアラと、敵との致命的な違いだった。このことにエイジは気がついた。これがキアラにとって唯一無二の突破口だった。

続いて、ガエターノがキアラの急所を狙う。

チェーザレは構えたまま動かない。

キアラはとっさに右に転がった。

すると、チェーザレはキアラの到達予測地点に銃口を向ける。た

だ、当てれば良い。二人がかりなら、ただキアーラが弾を受けるだけで雌雄を決する。

――続く――

## 14 くそれぞれの帰路く

「キアーラ危ない！」

エイジは、キアーラをとっさに押し倒す。

「な……エイジ！」

キアーラの周りには、鮮血が広がる。そのままにすれば、生きてはいれまい。

「なんで……あたしなんかの為に……」

「“なんか”なんて言うなよ……僕の愛したキアーラは、真っ直ぐで……素直な女性だよ……」

“なんか”だよ！ 人を殺すしか能の無い、殺人鬼だよ！」

エイジは悲しく微笑む。かつて、キアーラが仕事で関わった人間が、こんな顔をしただろうか？ 砂塵にまみれ、油にまみれ働くサラリーマンに、「仕事は楽しい？」と聞いた時の顔。全てをあきらめ、我慢し、全力を尽くしても癒えぬ喉の乾きを押さえて笑う男の顔。

「ガイド……」

「は？」

「ガイド……してくれた。イタリア旅行の……」

キアーラは、今にも泣きそうな顔になる。遙か彼方に置き忘れた泣き顔が、頭だけだしたような”前兆”

「あ……」

エイジは、今まで言えなかったことを言う。

「キアーラ、結婚しよう」

キアーラは驚愕に揺れる。

「な！？ 正気！？ これから死ぬっていう時に……あっ……」

これは、現実と向き合うことを避けたキアーラは、とっさに現実と向き合うことになる。

「気にしてないよ」

エイジの笑みは消えない。ただ、明日を見る眼。痛いほどの真っ直

ぐな眼。

「私なんかと一生いる気？」

「うん……ダメ……だよね……ごめん」

キアーラは、今度こそ涙を流す。久しく忘れていた涙に、泣く本人の方が驚く。

「い！」

「い？」

エイジはイタズラっぽく笑う。痛みが無いはずはないのだが。

「いいに決まってるんだろ！？ バカ！」

キアーラの怒鳴り声は何度も聞いているのに、今回は優しい怒鳴り声だ。

「嬉しいな……」

キアーラは最後にエイジに手向けを渡す。

「T i a m o ……（愛してる……）愛してる……愛してるよ………  
…。まだ処女なんだよ、エイジにくれてやるから死ぬな！今すぐ脱  
げ！」

エイジは一瞬驚く。むしろ死にそうなのはキアーラではないのかと  
思うほどの取り乱しよう。

「ムチャクチャだよ……」

「ガタガタ言うな！」

キアーラは逆ギレした。

「走馬灯、こっち来てから三回目だ……」

不吉な言葉に、二人は一瞬息を飲む。

「走馬灯？」

「人は……なんで思い出に……すぎるのかな？ ってふと思う。。  
」

キアーラは、いつしか忘れてしまった心を、何度となくエイジから  
もらう。それが、エイジを愛する最も大きな理由だ。

「失うことを恐れ……取り戻そうとし……奪いさえする。泣いて……  
…すがったその先に……何があるのかな？ 僕たちは……それを……

…識るすべはある……のかな？」

「わからないけど……忘れたくはないから。エイジと出逢ったこと、イタリア旅行、忘れたくない！」

過去にすぎたなど、いったい何年ぶりか？ キアーラは、奥歯を噛み締める。

「そっか……も……未練は……な……い……」  
固まるキアーラ。

「エイジ？ なあ、笑えよ、エイジィ……なあ……おい、……  
エイジィー！！」

安らかな、寝顔だった。最後の最後まで、エイジは怨み事を言わなかった。

キアーラのその叫びは、虚空<sup>きよくう</sup>に響き、消える。言葉が意味を無くし、消えた。キアーラの中の、キアーラの知っている”エイジ”という人間が、言葉が、死んだ。

『お別れは済んだかい？ クールガール』

双鬼の声が、キアーラを現実に戻す。

「よくもエイジを……」

『生き急ぐヤツは死ぬヤツなんだぜ？』

キアーラは怒号する。

「ご忠告、余計なお世話だ……ぜ！」

隣にあったドラム缶を投げるキアーラ。

ガエターノが蹴り返そうとする。

すると爆音が轟いて爆発。手榴弾を仕込んであったのだ。双鬼の一人、ガエターノを殺す。

「ガエターノ！」

チェーザレは、産まれて初めてかもしれないほどの哀しみに触れる。  
(これが、死なれるということか……)

キアーラは、威勢良く二挺拳銃を轟かす。

「さあ、死の舞踊りの始まりだ！ ハデに舞え！」

「死んだ兄ちゃんみたいにか？」

チェーザレは、言葉に殺しを込めた。ベレッタの弾、九ミリパラベラムの一撃にも込める。キアーラの哀しみは死んだ。キアーラも言葉に殺気を込める。

「んだと？」

キアーラは45ACP弾を間違いない距離から放った。

「死んだ兄ちゃんみたいにかと聞いている。人間はなあ、ダメだと思ったらダメなんだよ。あの兄ちゃんがそうだったようにな……！」

そんな弾が”この俺に当たるわけがねえ”

キアーラは眉をひそめる。

「当たんねえ？ 当たんねえ弾なんかあるかよ！」

「それがお前の”限界”だ。」

チェーザレは弾切れを狙い、人海戦術にでる。一秒でも非常時用の発信機を使えば、最寄りの仲間が来るはずだ。もはや、このマフィアは双鬼のものとなる予定だった。秘密裏に、だが。だからエイジも気が付かなかった。

キアーラはカートリッジを交換しようにも、チェーザレは交換する暇は与えてくれない。

間もなく現れた敵を撃つが、十人はいようか？

弾を失う。そして、キアーラは突進する。

致命傷になりそうな所は左腕を盾に、チェーザレは狂ったと判断して油断する。

キアーラはチェーザレスキについて右手を背中側の腰に。

キアーラに笑みが戻る。

「チェックメイト」

残ったただ一つの武器、オマモリのデザートイーグルでチェーザレの頭を撃つ。さすがに剛腕のキアーラも、デザートイーグルの反動には悲鳴をあげた。優秀なマズルブレーキ……銃口制動機を付けて

いなかったため、銃口がブレてゼロ距離からでもチェーザレの頭左半分にしか当たらなかったが、見事・50AEの鉛玉で頭を粉碎した。

それを見て、残りの烏合の衆は消えた。

キアラはたたずんだ。人目から離れて一人、泣く。

アシ、洗おうかな……？

――その後――

キアラは退職願いを出した。

エイジを失った心の痛みは、火傷を負った皮膚が痛むように、消えなかった。

アレッシオ達に対し、

「思えば、あたしたち似た者同士だった。不器用でまっすぐで。殺したくなくて、殺したくて。愛されたくて、愛したくて。それが絆かな？ 家族みたいに大切な……兄妹みたいな。」  
とつぶやいた。

アレッシオは敬礼した。アルフレードもそれに習う。

『vai, Vai!』

「Ciao」

『さあ、行きな!』

「じゃあ、また」

それだけ言うとキアラは去った。

ピストレーロは、人員を補給した。彼らは氷山の一角を倒しただけだから、アレッシオとアルフレードは新たな仲間と日々戦う。残党狩り、である。

アレッシオは、解体を言い渡されと思ったし、転属で良いと思った。

エンツォがそれを知りながら再構成したのだ。いつか、キアラと

エイジが帰って来た時、帰る場所があるように。

アルフレードは、別にヤクザな仕事が好きなのでも、殺し屋が気に入ったわけでもない。やはり、ピストレーロは帰る場所なのだ。この無法の島が、住処<sup>すみか</sup>なのだ。

キアーラは、エイジの亡骸を連れ、ミラノに里帰りをした。

「madre<sup>ただいま</sup>（お母さん）、padre（お父さん）、eccom  
i qui！」

キアーラは思った。生き続けよう、エイジと一緒に。走り出そう、未来に！ だって、こんなにも空が蒼いんだから！ 青の洞窟みた  
いだから！ ……ね？ エイジ。



## 14 くそれぞれの帰路く（後書き）

さて、戦う者、死ぬ者、残された者……さまざまの思いが交差した物語はいかがでしたか？

” 狂気と芸術の交差する街 ” その街は、他にもさまざまなものが交差し、ほどけていった……。

今回は命が多少軽く思えたかもしれませんが。

それは、今回ガンアクションをしたかったので、誰でも読めるよう、悲惨な書き方をしなかっただけです。仕様、ですね……。多分仕様です。（多分て……

ではでは

最終話は、昭和五十六年に発表された歌、夢○途中……○の途中ですね、来生た○お……○かおさんの歌をエンドレスで聴きながら読むと良いかも。最近のドラマ、” セーラ○服と機関銃 ” のテーマソングに似ています。作詞作曲が同じだし、最初からそのつもりだったのでは？

二十代以下の方々は、親御さんにカセットテープでも借りてみたり、CD探してくださいませ。

あと、途中で知ったのですが、EXI○EがTiAm○歌ってますね。パクリじゃないのですが、ラストの戦闘後、キアラが去るシーンでTiA○O聴くと良いかも。

物語の最後に各話のあらすじと武器解説があります。

## あらすじ1（前書き）

各話のあらすじと武器解説があります。

読み終わった人のおさらいや、飛ばし読み、立ち読みにご利用下さい。

ネタバレ注意

## あらすじ1

イタリアはシチリア島で起こるテロリストの事件。時は二千八年十二月二十四日水曜日。全てはここから出会い、必然が始まる。

### ●一話

武器庫から銃器をいただいたピストレーロという殺し屋兼なんでも屋。

犯罪者と一般人の区別がつきづらい、胸くそ悪い世界を保持し続けたがる右翼。それに対し、改革をし、新世界を統一する信念の左翼政治家に通ずるテロリスト。。。

アレッシオ達は下働きみたいなものだと言ったと事務所へ帰りがてらエイジに言った。

### ●二話

軍警察（憲兵隊）の手の及ばないシチリア島。国家警察はいるが、保守派が人民を幸福にすると主張する右翼政治家によって行動は制限されている。国家警察総局……DCPPはシチリア島を”黙認している”。あくまで、観光客の為のサツ。ましてや、治安作戦中央部隊……レザーヘッドは”認知していない”。以上の説明を受けるエイジ。

エイジは、殺られた仲間の補充まで協力を”任意”でアレッシオから要請されている最中だった。

ピストレーロの事務所……モンレアーレに向かう一向。エイジはそれぞれに武器の説明を聞く。

到着後、エイジはパスポートをアルフレードに焼かれる。ハッカー兼パシリとして。

エイジは、自分の意志を伝える。正義のために戦う！

### ●三話

エイジの武器が決まる。ナイフはクリスリーブ・プロジェクト？。銃はグロック19。サブマシンガンはVZ61スコープオン。さっそく戦場へ向かう。今回は敵は烏合の衆。適当にあぶって飛び出した雑魚<sup>ザコ</sup>を狙い撃ちすれば任務完了だ。

アレッシオは、エイジの初の戦場をこれに定めた。あぶり出し役だ。殺しはさせない予定。

アルフレードは、アレッシオに言う。「俺達四人、また全員孤児<sup>みなしご</sup>なのかねえ……」

敵のボス、レオポルドが尖鋭の部下を揃えた。ガエターノ、チェーザレ……実力No. 1二挺拳銃使い、双子男性。シモーネ……No. 2男性。ヒロイン中毒者だが、超一流の狙撃手。ペトリューシユカ……No. 3女性。ハッカー。

### ●四話

時は千九百九十五年七月一日。アルフレードは、サルヴァトーレと名乗る男と出会う。

「怨恨で人を殺すな。怨恨は捨てろ」そうサルバトーレに言われた。「生きたければ殺せ。死にたい者に用は無い」とサルバトーレは言う。

アルフレードは、サルバトーレをオヤジと呼ぶことにした。

サルバトーレは殺された。アルフレードはまた一人になった。二十七歳の時だった。

間もなく、アルフレードはピストレロに入った。もはや、殺し屋以外できないと悟ったからだ。そして、アルフレードはこの世界に身を置けば、いずれかたきがうてると信じる。

### ●五話

アレッシオは元イタリア軍大佐だった。”金色<sup>こんじき</sup>の獅子”それが彼の異名だった。

ラウラは元イタリア軍少佐だった。

しかし、ラウラはアレッシオに示唆を舐められたことがあった。過去、合同演習でアレッシオの作戦がラウラの作戦より優先され、勝ったから。

そして、今回敵マフィアピオーヴラとテロリスト、ウルティマの戦争が勃発した。

ウルティマのボスはエンツォ。戦場に自ら赴き、指揮を執る。戦術はアレッシオ任せだが。

しかし、これは敵の罠だ。敵は三十人と宣言。もし、味方が三十人以上の数をこちらが投入した場合、”ウルティマは卑怯者”と言われる。かといって、三十人以内の手勢を向けても、相手はただ”戦争を引き受けたいちマフィア”レオポルドが手勢を失うわけではない。これが政治家がリーダーという利点だ。レオポルドがテロリストの頭数を減らす為にピオーヴラとは違う、イタリアンマフィアに小規模な戦いを依頼したのだ。

しかし、エイジの情報操作とアレッシオの戦略で勝った。

レオポルドはラウラと一緒に戦場を去った。「今度はあの三人を連れて来よう」そう言い放った。

## ●六話

通り魔にスペツナズ・ナイフで刺されそうになり、回想シーンへ。お母さんの思い出。英二が幼い頃から毎日描く画用紙いっぱい夢の世界を誉めてくれたお母さん。『ママ、遠くに行っちゃうの?』

『もう、会えないの?』

『そんなことない。英ちゃんが、画家になったら。……画家になったら画展、観に行く! ……絶対、観に行くから……』

「エイジ!」

現実に戻される。キアラに助けられた。

花屋まで付き合うキアラ。今日は三月八日曜日、Festa della donna…男性が女性にミモザの花を贈る日だろ。

エイジはキアーラにプレゼントした。「あ、ありがと。嬉しいよ……あたしなんか貰えるとは思ってなかったから」

キアーラは、案外嬉しそうに微笑む。

エイジとキアーラは、こそばゆい幸福感を得ながら微笑み合った。

” Bella Notte ”という曲が流れる。麗しき夜という意味だ。

## ●七話

エイジはキアーラに一週間休暇取れと言われた。ミモザの花のお礼に一週間二人でイタリア一周旅行する。もちろんキアーラのおごり。一日目ナポリ着

数時間後の夜、ローマ着

キアーラは数ヶ月イタリアガイドやって辞めたことを話す。「趣味の二挺拳銃の腕を買ってくれたんだ。ボスが」

## 二日目

ヴァチカン市国にてサン・ピエトロ大聖堂鑑賞。

ミケランジェロは、六歳の時に母に先に逝かれた。エイジと同じだ。ミケランジェロは、毎日泣きながら彫った。そこには、芸術も、神も、バチカンもなかった。ミケランジェロは、自分を遺して去った母を泣きながら彫ったんだ。時には優しく、時には激しく愛するように彫った。そこには、芸術家の誇りすらなかった。あるのは、母の”亡骸”<sup>なきがら</sup>だった。

エイジもそうだ。描いた。描いて、描いて、描き続けた。それが使命であるかのように。目の前の紙をぐちゃぐちゃに塗りたぐって、ただ信念の為に描いた。母に認めてもらうため。母に会う為に。結局、エイジはピエタの前で十分間泣きじゃくった。動けなかった。

キアーラは謝る。「絵、彫刻。考えてみたら、エイジは美術留学生だったな。……夢、捨てたんだよね？あたし達に巻き込まれて」仕方ないさ。と許すエイジ。

ベネチア着ベネチアに一泊した

## ●八話

### 三日目

ベネチアをゴンドラで一周する。

ピサに列車で移動してピサに宿泊した

### 四日目

ピサの斜塔観光が目的でピサ中央駅に着いた。

キアラが気まずそうにエイジに聞く

「美術館、行かないかな？」

「いこ！予定狂うだろ？それに、ピエタの時は特別。」

エイジの気持ちは、すっかり晴れた。

カプリ島に行く船乗り場に行く電車の出発駅前に泊まった。

## ●九話

### 旅行五日目

カプリ島に到着

港前のホテルに一泊。

### 六日目

青の洞窟観光。

二人は想いを重ね、ついにキスした。

エイジは、「最初は殺し、ためらった？」と聞く。エイジは、興味本位で聞いたわけではない。殺し屋稼業、人殺した怖さなど語れない。愚痴をこぼしてはいけないのだ。エイジは、殺しはしてない。だが、肌が痛むくらい感じるのだ。キアラは、ためらったと答える。

事務所に帰ると、冷やかされる。

そして、物語は予想し得ない未来という名の運命の渦にのまれてゆく。

あの日、皆は確かに笑ったと言える日を送るのが精一杯だった。

## あらすじ2

### ●十話

エイジとアルフレードは、敵を逆スナイプする。アルフレードはSIGブレイザーR93を使用。伏せ撃ちの体制をとる。

敵はシモーネ……サルバトーレのカタキだ。」

エイジは弾をくらいかけ、側頭部にかすり傷ができた。

カタキ撃ちとはむなしなものだと、アルフレードは思った。

### ●十一話

五月ペトルーシユカとの戦い。

ペトルーシユカの祖父が中国人だった。日本人に第二次世界大戦で殺された。

ちょうど良いと、ペトルーシユカは思った。日本人に泡をふかせてやる。

蜘蛛女の力は、敵の機械が自機にアクセスするとフリーズして破壊する。

しかし、エイジがハッキング中の流れを見て打開策を講じる。銃撃戦へ。

ホテルで、銃撃戦になった。

突撃銃、AK-74とショットガン、ベネリM3 スーパー90しか使えない。

ペトルーシユカはもはやこれまで。ならばエイジを道連れにしようとエイジを挑発する。

即座に反応したのはキアラだった。ペトルーシユカは声を上げる暇もなく絶命した。

しかし、今回のエイジの働きは、ウルティマの面々に広く広がった。ラウラは復讐を誓う。



## ●十二話

エンツォに電子メールが届いた。

敵から、敵No.3 蜘蛛女の命を奪った者と果たし合いをしたい。  
という内容だ。

ラウラの指定した闘い方で勝者を決めて、キアーラの代わりにアレ  
ッシオが勝つ。

ラウラを殺されたレオポルドは深い悲しみに堕ちた。

レオポルドは考えを巡らせた。もういい。せめてイタリアンマフィ  
ア、ピオーヴラがボスを失ってチリジリになる前に、双鬼を呼び出  
し、指揮系統を任せ、全軍を持ってウルティマを潰しにかかる。そ  
の後は別のイタリアンマフィアを使えば良い。

時は、最終章へ。

## ●十三話

二千九年、六月十九日金曜日、午前九時。アレッシオ達はウルティ  
マのボス、エンツォの指示を受けていた。

まさに、今、決戦の時だとも言われた。目標はレオポルド邸内のレ  
オポルド。

アルフレード率いる十人のスナイパーは、敵のボス、レオポルドの  
いる部屋を狙撃。レオポルドを倒す。

キアーラは双鬼と戦う。獲物は、H&Amp;K MK23とスミ  
ス&Amp;ウェッソンM29。MK23は去年末に手に入れた。

周りをウルティマの猛者達に囲まれた双鬼以下複数の敵は、ウルテ  
イマを叩き、無理やりこの屋敷を脱出するしかない。

ガエターノはH&Amp;K P7M13二挺。

チェーザレはベレッタM92FS二挺が獲物。

キアーラは、四の銃口の脅威をこれほどまで恐れたことを、経験し  
なかった。

双鬼は対照的に肩を撃たただけだった。しかし十分。二人の二挺

拳銃計四挺が二人で二挺になった。

## ●十四話

「キアーラ危ない！」

エイジは、キアーラをとっさに押し倒す。

エイジが、死んだ。

まずキアーラは、双鬼の一人、ガエターノを殺す。

チェーザレは、産まれて初めてかもしれないほどの哀しみに触れる。

（これが、死なれるということか……）

キアーラは、間もなく現れたザコを撃つが、十人はいる。

キアーラ弾を失う。そして、キアーラは突進する。

致命傷になりそうな所は左腕を盾に……キアーラは、残ったただ一つの武器、デザートグルで撃つ。――その後――

キアーラは退職願いを出した。

アレッシオ達に対し、

「思えば、あたしたち似た者同士だった。不器用でまっすぐで。殺したくなくて、殺したくて。愛されたくて、愛したくて。それが絆かな？ 家族みたいに大切な……兄妹みたいな。」

とつぶやいた。

アレッシオは敬礼した。アルフレードもそれに習う。

『vai, Vai!』

「Ciao」

『さあ、行きな！』

「じゃあ、また」

それだけ言うとキアーラは去った。

ピストレーロは、人員アレッシオとアルフレードは新たな仲間と日々戦う。残党狩り、である。

エンツォはピストレーロ再構成した。いつか、キアラとエイジが帰って来た時、帰る場所があるように。  
キアラは、エイジの亡骸を連れ、ミラノに里帰りをした。

## あらすじ ネタバレ無し

国家警察以外の治安維持組織がないもいひとつの世界のイタリア、シチリア島で起こるテロリストの事件。時は二千八年十二月二十四日水曜日。全てはここから出会い、必然が始まる。

### ●一話

ピストレーロという殺し屋兼なんでも屋とエイジが会う。  
右翼に対し、改革をし、新世界を統一する信念の左翼政治家に通ずるテロリストの傘下だ。

### ●二話

エイジは、殺られた仲間の補充まで協力を”任意”でアレッシオから要請されている最中だった。  
到着後、エイジはあるきっかけでハッカー兼パシリとして働くことに。

### ●三話

エイジの武器が決まる。  
初の戦場は殺しはさせない予定。  
アルフレードは、アレッシオに言う。「俺達四人、また全員孤児みなしこなのかねえ……」  
敵のボス、レオポルドが尖鋭の部下を揃えた。

### ●四話

時は千九百九十五年七月一日。アルフレードは、サルヴァトーレと名乗る男と出会う。  
「怨恨で人を殺すな。怨恨は捨てろ」そうサルバトーレに言われた。  
しかし、とあるきっかけで間もなく、アルフレードはピストレーロ

に入った。

### ●五話

アレッシオの元の職業が明らかに。ラウラはその頃からアレッシオにライバル心をむき出しにする。

そして、今回敵マフィアピオーヴラとテロリスト、ウルティマの戦争が勃発した。

レオポルドはラウラと一緒に戦場を去った。「今度はあの三人を連れて来よう」そう言い放った。

### ●六話

通り魔に刺されそうになり、回想シーンへ。

お母さんの思い出。

現実に戻される。キアラに助けられた。

花屋でエイジはキアラに……？

### ●七話

エイジはキアラに一週間休暇取れと言われた。一週間二人でイタリア一周旅行する。もちろんキアラのおごり。

エイジは、前回のお母さんの思い出を再び思い出し、エイジはピエタの前で十分間泣きじゃくった。動けなかった。

キアラは謝る。

仕方ないさ。と許すエイジ。

### ●八話

エイジの気持ちは、すっかり晴れた。

### ●九話

カプリ島、青の洞窟観光。

二人は想いを重ね、ついに……？

## ●十話

エイジとアルフレードは、敵を逆スナイプする。  
そこでアルフレードは、とある人のカタキと出会う。そして……？

## ●十一話

五月ペトルーシユカとの戦い。  
ペトルーシユカこと蜘蛛女の力ハッキング。  
ホテルで、銃撃戦になった。  
その時、キアーラは……？

## ●十二話

エンツォに電子メールが届いた。  
ラウラからの果たし状。  
アレッシオが戦う。

## ●十三話

二千九年、六月十九日金曜日、午前九時。アレッシオ達はウルティマのボス、エンツォの指示を受けていた。  
まさに、今、決戦の時だとも言われた。目標はレオポルド邸内のレオポルド。  
キアーラは双鬼と戦う。

## ●十四話

「キアーラ危ない！」  
エイジは、キアーラをとっさに押し倒す。  
そして、キアーラは突進する。  
決戦の後……キアーラはアレッシオ達に対し、  
「思えば、あたしたち似た者同士だった。不器用でまっすぐで。殺したくなくて、殺したくて。愛されたくて、愛したくて。それが絆、

かな？ 家族みたいに大切な……兄妹みたいな。」

とつぶやいた。

アレッシオとアルフレードは新たな仲間と日々戦う。あれ？ キアラは……？

エンツォはピストレーロ再構成した。いつか、キアラとエイジが帰って来た時、帰る場所があるように。

## 武器 ナイフ、拳銃解説

ナイフ

クリススリーブ・プロジェクト? : 全長三百二十ミリ、刃渡り百九十五ミリの鍛造炭素鋼を削りだした一体成形のナイフ。グリップは中空で、柄のキャップを外せば、サバイバルツールの収納もできる。

スベツナズ・ナイフ : 見た目は円筒形をしており、グリップ部とシース（鞘）部に分けられる。シースは金属製で、装着したままでも警棒のように使用できる。グリップ内部に30cmほどの強力なスプリングを備えており、鐔の位置に配置されたレバーを押すことで刀身を前方に10mほど射出することができる（ただし、射出後の刀身の再装填は、強力なスプリングを縮めなければならぬため困難を極める）。周囲に気付かれぬよう離れた標的を倒したり、近接戦闘時の奇襲として有効な武器と考えられている。

口径 : 銃における口径は砲と同様に銃身の内径（? 発射される弾丸の直径）を示す。単位としてはヨーロッパで主用されるメートル法と米国で用いられるヤード・ポンド法の二つが用いられている。このほか重量単位が用いられることがある。銃身長は3インチや77mmといった実測値がそのまま表記される。

拳銃などにおいて、n口径とは、銃口の内径が「100分のn」インチである。1インチはおよそ25.4ミリ（ $\parallel 2.54$ センチメートル）であるので、たとえば40口径は約10ミリである。また50口径は別名「半インチ」（12.7mm）となる。また、口径の後ろに固有の名前をつけて弾種が表される。たとえば日本の警察官用拳銃、ニューナンプM60（現在はS&amp;W M37だが同じ）の口径は38口径で弾薬は、38スペシャル弾が用いられ



ている。

欧州においては弾種は口径×薬莖長の表記が用いられている。単位はいずれもmmである。たとえば 9mmパラベラム弾として知られる拳銃弾は9mm×19の名前でも知られている。

## 銃

コルト・パイソン・357マグナム四インチ：この四インチモデルは全長二百四十一ミリ。重さ約一キロ。357マグナム弾のコルトの最高級リボルバー拳銃。開発は千九百五十五年。当時画期的な撃った時銃身の跳ね上がりを抑制するフルラグバレルや、加熱した銃身から陽炎が発生するのを防ぐベンチレートリブを盛り込み、精度も競技用として使えるほど。ただし、重く粘るトリガーが欠点となり、性能発揮には時間がかかる。一般人が想像する形の拳銃。

スミス&amp;wesson M29：四十四口径のマグナム・リボルバー。これは八インチモデルで全長二百六十六ミリ、重さ約一・五キロ。小型のサブマシンガン並み。ハンティング用として使えるが扱いは難しい。コルト・パイソンよりリーチが長いように見える一般人が想像する形。

44オートマグ：歴史的な拳銃で、全長二百九十五ミリ、重さ約一・五キロ。リボルバーではなく、オートマチック。ハンドガンにM16アサルトライフルと同様のロータリーボルト機構を組み込んで、反動を軽減し、マグナムカートリッジの使用に耐えるよう設計したが、実用的ではなく、わずか十一年で生産終了。当時はまだステレンスの潤滑機構が発達していなかったこともあり、作動不良が頻発する”オートジャム”の悪名で名高くなってしまった。美しさや、斬新な構造には熱狂的ファン多数。装弾数七十一発。しかしシルエットは美しい。まさに骨董品である。

H&amp;K MK23：別名USソーコム・ピストル。口径は45口径。重量約1.2キロ、全長245ミリ。米軍の特殊部隊向けに開発された物。コストやコンシールド性は度外視されているが、性能面ではカスタムガンに匹敵する。装弾数12発。

グロック19：全長百七十四ミリ、重さ約六百グラム。千九百九十八年、全米の警察で五十パーセント以上のシェアを誇る。セルフデイフェンスやバックアップ用として人気が高い。ポリマーフレームの草分けになった銃。トリガーに指を触れただけで解除されるセイフティと、落下などの衝撃による暴発を防ぐファイアリングピンロック機構を組み込んで、マニュアルセイフティを省略している。つまり、エイジのような安全装置を外し忘れるシロウトでも扱える。装弾数は十五十一発。形は銃身とグリップを詰めたコンパクトモデル。

マテバM2006M：最短は五十一ミリバレルで最長は百五十三ミリ。七段階の調整ができる。イタリア製のリボルバー。マテバ社はイロモノのリボルバー拳銃を作るのに心血を注いでる。普通リボルバーはシリンダーの一番上にきた弾丸を発射するが、これは一番下にきた弾丸を発射する。バレルとラグの位置も逆、ハンマーも下。この形の理由は銃身の位置を腕の軸線に近づけたぶん、反動を軽減する目的。さらにこの銃は、用途に合わせて銃身を簡単に交換できる。

AMTモデル・バックアップ？：AMTには大口徑ばかりでなく、護身用の小型拳銃もある。口径は380ACP。別名九ミリシヨート弾と呼ばれてる弾。全長百二十七ミリ、重量約五百グラム。九ミリパラベラムの六割弱の威力だが、対人用としては十分。撃発機構はシンプルなシングル・アクション・ストライカー方式だが、その

ぶん安全性にも配慮して、グリップ・セイフティも備えてる。装弾数は五十一発。グリップの下がギザギザしてるのが特徴。

ベレッタM93R：全長二百四十ミリ、重量約千百グラム。イタリア内務省が、セキュリティ要員の装備として開発を要請したもので、販売対象は政府機関のみ。一般市場には流通していない。通常の自動拳銃とは異なり、一回の射撃で三発の弾丸を発射する三点バースト機構を備えた、ピストルとサブマシンガンの中間に位置する銃。連射の反動をコントロールするために、マズル・コンペンセイターと折りたたみ式フォアグリップを装備し、さらに専用のショルダー・ストックを装着することもできる。作中に出るモデルは第二期生産型で、現行のものはマズル・コンペンセイターの形状が変更されている。装弾数は二十十一発。形は銃口がサブマシンガンみたい。

S&amp;W M5906：全長百九十一ミリ、重量約千グラム。リボルバーメーカー色の強いスミス&amp;ウエッソン社のM39から派生したオートマチック・シリーズの一つ。バリエーション豊富で、一時期は四桁の型番で識別してた。頭二桁が口径とモデルを意味してて、この59ナンバーは9ミリ口径の副列弾倉モデルのこと。三桁目が機構とサイズで、0はスタンダードサイズのシングル／ダブルアクション兼用トリガーシステム四桁目は材質で、6はステンレス・スチールの意味。実射性能ではトップクラスだったが、スライドもフレームも鉄のため、重く商業的には成功したとは言い難い。装弾数は五十一発。形は普通。シルバーが美しい。

H&amp;K P7M13：口径九ミリ。全長百七十五ミリ、重量約千グラム。新型の警察用拳銃を求めるニーズに応じて開発された銃。試作段階ではPSP：携帯ゲーム機ではありません（ポリツアイ・セルフストラッゼ・ピストーレ）と呼ばれ、セイフティメカニズムと操作の簡便性に重点を置いた拳銃。特徴は、銃身下に配置

したガス・シリンダーにチェンバーの火薬ガスを誘導し、スライドを圧迫して排莢タイミングを調整するガス・ディレイド・ブローバック機構。それと、グリップ前面のレバーを握りしめることで、撃針を撃発位置に起こすスクイズコッカー。このスクイズコッカーは、スライドストップ解除を兼用している。装弾数は副列弾倉で十三十一発。見た目小さな拳銃でグリップが大きく見える。

コルトⅡガバメント：四十五口径。大口徑オートマチック拳銃の代表格。千九百十一年に米軍で制式採用されて以来、多くのコピーや亜種を産んだ名銃。九ミリ口径が主流のヨーロッパに対し、アメリカでは四十五口径が支持された。ガバメントのバリエーションの一つで、コンバット・コマンダー。銃身を短縮し、リング・ハンマーを採用して小型軽量化を計ってる。前身となったコマンダー・モデルは、軽量化のためにアルミニウム合金を使用したものの、45ACP弾を使用するためには強度に問題があり、これはスチール材を採用している。

ベレッタM92FS：米軍に制式採用された銃。口径九ミリ。弾はオート用とは最も一般的なものの一つ、九ミリパラベラム。全長二百十七ミリ、重量約千グラム。ダブルアクションやハンマーデコッキングなどの機構を備えている。装弾数十五十一発。形は目の錯覚だと思うがスマートに見える。スライド上部が大きく切り欠かれたデザインは、排莢不良を起こさないようにするため。

デザートイーグル50AE：IMI（イスラエルミリタリー・インダストリー）が誇る、作者の知りうる中では世界最強のハンドガン。作者が今一番欲しい拳銃です。あ、モデルガンです、ハイ。ハワイに行く機会があれば、反動で吹っ飛んでも良いから競技用として試し撃ちしたいです。っていうか、今でもハワイでは競技射撃可なのでしょうか？……話に戻ります。もともと、357や、44口

径のリボルバー用マグナム弾を使用する自動拳銃として設計されたが、このバージョンはより強力な50口径アクションⅡエクスプレス弾を使用する。拳銃でありながら、突撃ライフルと同様のガスⅡブローバック機構を採用しているため、作動の信用性も極めて高い。マグナムⅡオートマチックの完成形態と言える。だが重量千七百六十グラムと、並の人間では扱えない。反動はなんとか制御できるレベルといったところ。行き過ぎた進化の代償と言える。生物に例えるなら、恐竜……？言い過ぎだとはわかっているが、そう言いたくなる。形はとにかく銃身が長くデカイ。一瞬ハンマーかと思うと言いたい。

## ショットガン、突撃銃、サブマシンガン、ライフル解説

ショットガン

ベネリM3 スーパー90：全米のSWAT隊員にもてはやされたコンバットショットガン。作中のベネリは、オートマチック限定だった旧型のM1と違って、このM3はポンプアクションに切り替えて操作することも可能。アメリカ陸軍のJSCS（総合戦闘ショットガン）プログラムでも採用された。形は頭に恐らくレーザーポインタらしき（資料が手元にありません）物が箱を横に付けたような形のニョロつと長い感じの有機的フォルム。

## 突撃銃

AK-74：千九百七十四年からロシア軍に制式採用された突撃銃。AK-74に発展した経歴だが、共産圏に広く普及したアブソマツト・カラシニコバ47（千九百四十七年式カラシニコフ突撃小銃）は、まずレシーバーをプレス加工にして生産性を向上させたAKMに進化し、このAK-74に発展した。最大の変更点は口径で、AK-47、AKMで使用された7.62ミリ×39ロシアン・ショート弾に代わり、AK-74では5.45ミリ×39ロシアン弾を使用している。加えて銃口には、大型のマズル・コンペンセーターが装着された。これは発射時の銃身の跳ね上がりを抑制し、さらに銃声を前方向に逃がす働きもある。見た目は木製の模様と鉄のコラボレーションが美しい。シルエットは普通。

## サブマシンガン

IMI UZIサブマシンガン：イスラエルが国防軍備のために開発したサブマシンガン。ウズイと呼ばれ、優れた性能から、世界に

認められている。T字の後ろに体に押し当てて撃つための突起が付いていて、スパナのような形。

H&amp; K MP5：重量約三キロ。MP5はドイツ語で「5号機関拳銃」を意味する Maschinenpistole 5の略称。HK54とも呼ばれていた。九ミリパラベラム弾を使用する短機関銃。開発は千九百六十五年。ボルト解放式のSMGが主流だった当時、G3ライフルと同様のクローズボルト・ローラーロッキングシステムを採用したことで、他の追従を許さない命中精度を誇った。以来、各国軍特殊部隊や特殊警察がこぞってこの銃を採用し、特殊部隊装備の代表格となった。形はシンプルな機械的フォルム（作者談）。ちなみにMP5Kは銃身を切り詰め、全長を三百二十五ミリに抑えている。このサイズなら、ショルダーホルスターで携行したり、アタッシュケースに内蔵するコンシールド性を要求する任務にも対応できる。主にシークレット・サービス向け。内務省治安作戦中央部隊……NOC S装弾数三十発。発射速度は毎分八百発。

Ingram M11：四十五口径。全長二百四十九ミリ、重量千五百グラム。ボルト解放式の Ingram M10サブマシンガンを、さらに小型化するために、口径を380ACPに落として、ウズイから頂戴したオーバーハング型ボルトを組み込んだ。単純構造ならではの耐久性とコンパクトさ、毎分千二百発の連射性がウリ。形は箱のよう。

VZ61スコピオン：冷戦下の旧チェコスロバキアで開発された小型のマシンピストル。使用する32ACP弾は、威力としては心許ないが、コンパクトなサイズとコントロールの容易さが長所。グリップ下側のレイト・リデューサー・ノブで、発射速度を毎分最

高七百五十発まで調整できる。フルオート射撃では、一マガジンを一秒たらずで撃ち尽くしてしまう。折り畳みストックのストッパーを兼ねたフロント・サイト・ガードや、マガジンをフォアグリップとして兼用できるロック機構など、細かい配慮が行き届いている。作者はこの形を見て、小型サブマシンガンはコレだ！と、思わず叫びそうになったほど。いわゆる一目惚れである。作者よ、一度頭を医者に診てもらえ…。

ライフル

H&amp;K G3 SG／1：西ドイツ軍に正式採用されていたG3ライフルの狙撃モデル。ドイツH&amp;K社の傑作である。”精度は二の次。安価で大量生産”という一般的なサブマシンガンの開発コンセプトとは異なり、ライフルを小型化する形で開発された。セミオート射撃時にヘアセット・トリガーに切り替えられる。引き金の重さを軽減し、射撃の精密を向上させられる。軍部より、治安部隊でのライフルとして使用される。形は少々角張って複雑な形の印象。銃口がサンマのお頭みたい。

M16A2：口径は依然五・五十六ミリ＊四十五。強化プラスチックやアルミニウム系軽合金の多用で現代軍用ライフルの決定づけたM16の発展型。SS109弾薬にあわせ特化し銃身のライフルリングが倍近く急ピッチのものになってる。また、弾薬消費の激しいフルオート機構を廃し、代わりにバースト・リミッターで連射を三発限りにしている。素人目には、サイズさえ分かなければシルエットはマシンガンのように。カートリッジがあるからである。

スタイアー・マンリッシャーAUG：使用弾は五・五六ミリレミニトン高速弾。作者が個人的に見た目一番好きなライフル。緑色の銃身に茶色のブロックのようなカートリッジが特徴で曲線も美しい。



爬虫類みたいとか言わないでください。オーストラリア製の軍用アサルトライフル。アイルランドや南半球の各国で制式採用された。ストックにレシーバーを収納するブルバップ構造や、内部部品にまで大胆にプラスチックを多用した、ハイテクライフルの走りになった銃。開発は千九百七十六年と古いが、ウェポン・システムとしても完成されてる。機関部やバレルユニットが簡単に分解できるから、左手射撃用に排莖方向をチェンジしたり、銃身の交換でカービンや分隊火器に組み換えたりするのも一回で可能。ちなみにカービンタイプは黒に近い灰色。このタイプは、銃身長がG3やカラシニコフと同クラス。これがブルバップ・タイプの良い所。

SIGブレイザーR93：ストレートダブルアクションという独特の機構を持つライフル。ボルトのロックを解除するために半回転させる必要がなく、ワンアクションで操作できる。形は天体望遠鏡のよう。二脚架。ロングレンジスポーターというモデルは、バットプレート、チークピース、それにトリガーが自在に調整可能な精密射撃専用タイプ。

ゲパルドM1アンチ・マテリアル・ライフル：対物用の大口徑ライフル。口径は概ね五十口径以上。全長千五百七十ミリ、うち銃身長が千百ミリ。重量十九キロ。対物ライフルは、対人より車両や離陸前の対空機を標的とすることを想定された銃。有功射程も一キロ以上が普通。二キロクラスの狙撃さえ可能とされている。これはハンガリー製で、使用弾薬は十二・七ミリ×百七機関砲弾。輸出用に、西側規格の十二・七ミリ×九十九口径のものも製造されている。作動は手動単発式。ボルト操作でなく、いったん撃発機構のユニットをグリップごと引き抜いて、その先端に弾薬を装填し、再度レシーバーに差し込む方式。二脚架。形は迷彩色のまさに戦車のような砲身。

**ショットガン、突撃銃、サブマシンガン、ライフル解説（後書き）**

最後まで読破、本当にありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8764g/>

---

狂気と芸術の交差する街

2010年10月9日03時30分発行